

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Fishing Activities and Economy among the Vezo of Southwestern Madagascar

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004068">https://doi.org/10.15021/00004068</a>

## マダガスカル南西部ヴェズにおける漁撈活動と漁家経済

飯 田 卓\*

### Fishing Activities and Economy among the Vezo of Southwestern Madagascar

Taku Iida

マダガスカル沿岸漁民ヴェズの漁撈活動と漁家経済について記載と分析をおこなった。漁法や漁獲物販売の定性的記載、漁撈活動時間や漁獲高の定量的分析などを通じ、以下の点を明らかにした。(1) 漁撈活動は、月周期などいくつかの点でサンゴ礁という漁場環境の影響を受けている。(2) 漁は「複合世帯」を単位におこなわれ、主に男性によって担われる。「複合世帯」内では、出漁頻度の少ない世帯もほぼ確実に漁獲分配を受け、必要に応じて漁に参加するという柔軟な分業がなされる。(3) 多くの漁民は、村から遠く離れた海域へ季節的に出かけてフカヒレやナマコなどの輸出向け海産物を捕獲し、莫大な現金収入を得ている。いっぽうで、村周辺でおこなわれる漁撈は利潤獲得よりむしろ自家消費を目的とする傾向が強い。遠隔地における安定した現金収入により、村周辺での漁撈はかえって自給的な性格を強めているといえる。

This paper describes and analyzes the fishing activities and household economy of Vezo fishermen on the southwestern coast of Madagascar. Through qualitative data on fishing methods and distribution of harvests, as well as quantitative ones on labor inputs and yields, the following points are clarified. (1) The character of the coral reef as a fishing ground affects the fishing activities in several ways, the form of the monthly fishing cycle for example. (2) Fishing parties often consist of male members of the same “complex household.” While households which seldom join the fishing party always share the harvest, they go fishing when required, thus achieving a flexible division of labor.

---

\* 国立民族学博物館民族文化研究部

**Key Words:** fishing activities, fishermen's household economy, self-consumption, Vezo, Madagascar

キーワード: 漁撈活動, 漁家経済, 自家消費, ヴェズ, マダガスカル

(3) While many fishermen acquire a large cash income through seasonal catch of shark fins and sea cucumbers in remote areas, their fishing activities near the village tend to aim at self-consumption rather than profit. It is the stable cash income in remote areas, paradoxically, that has strengthened the self-sufficient tendency of fishing near the village.

1 はじめに	5.2 魚の加工・調理と流通
2 調査地と調査方法	5.3 特殊な海産物の加工と流通
2.1 調査地	6 漁撈活動と家計
2.2 調査地における「世帯」と「複合世帯」	6.1 全体的な労働投入量
2.3 調査方法	6.2 複合世帯内部での労働分担
3 漁法の概要	6.3 漁法ごとの漁獲効率の比較
4 漁撈活動の諸側面——活動時間、漁法、同行者の選択	6.4 換金専門型の漁法と融通型の漁法
4.1 漁撈活動時間の日変化と月変化	6.5 漁獲高
4.2 出漁日数と漁法選択に関する性差	7 考察——アンパシラヴァ村における漁撈活動と家計経済の特質
4.3 出漁日数と漁法選択に関する季節差	7.1 漁場環境と漁撈活動
4.4 同行者の選択	7.2 生産単位としての複合世帯
5 漁獲の分配と消費・流通	7.3 現金獲得と副食獲得
5.1 漁獲の分配	7.4 現金経済下の食料自給

## 1 はじめに

マダガスカル島南西海岸部には、ヴェズ (Vezo) と呼ばれる人々が広く居住している。この人々は農耕や牧畜をほとんどおこなわず、沿岸漁撈を主な生業基盤とする点で他の民族と区別できるといわれてきた (Grandidier et Grandidier 1908: 250; Koehlin 1975: 23)。また、民族という概念を相対化した近年の研究においても、ヴェズというカテゴリーについての彼ら自身の語りが分析され、ヴェズのアイデンティティは海や漁撈と深く関わっていると指摘されている (Astuti 1995a; 1995b)。それによれば、ある人がヴェズであるかどうかはその人の出自には関係ない。漁撈など、海で生活するために必要な振る舞いを身につけていればその人はヴェズなのだという。筆者の経験では、「ヴェズである」という言い回しはしばしば「カヌーの操縦がうまい」、「魚に詳しい」、「漁がうまい」などの意味で用いられるいっぽう、ヴェズという呼称が他の民族呼称と対置されて用いられることもある。ヴェズというカテゴ

リーは明確な境界を持つとはいえないが、単なる職業的カテゴリーではなく、海や漁撈と深く関わってきた人々の民族的カテゴリーといてよい。

このようなヴェズ社会を理解するうえで、漁撈活動の詳細な記述やその経済的な分析はきわめて重要である。しかしこれまでは、ヴェズ漁撈の技術的側面や経済的側面がほとんど報告されてこなかった<sup>1)</sup>。筆者自身も、農村との比較においてヴェズ漁村の家計を論じたことがあるが(飯田 2001)、魚の捕獲や流通に関するマイクロなレベルの記載をおこなってはいなかった。そこで本稿では、日常的な漁撈の技術的および経済的側面の記載を通じて、ヴェズ社会の諸特徴を描き出すことを目的とする。

漁民社会を対象とした人類学的研究は数多いが、対象社会を理解するための切り口として漁撈活動そのものが取り上げられることは少ない。とくにまとまった民族誌的著作の中では、漁民経済の問題を正面から扱った Firth (1966) の例を除き、技術や経済に関する記述は周縁的な位置しか与えられてこなかった (Barnes 1996; Sather 1997)。しかし本稿のように、漁撈活動の記述を出発点として社会の諸特徴を描こうとするなら、より詳細な記述が求められよう。個々の漁民の生活にとって漁撈がどれほど重要であるのか、漁撈に依存する生活の特徴とは何か、といった点をも具体的に提示する必要がある。

このような中で、生態人類学 (Orlove 1980; 秋道ほか 1995) の分野では、人と自然環境の関わりを明らかにするためさまざまな生業活動が定量的に記述され、漁撈活動も比較的早い時期から研究対象として取り上げられてきた (Ohtsuka 1970; 原子 1972)。当時の研究は「適応」を過度に強調し、ローカルな社会の自律性や生態系の均衡性を仮定してきたとして批判されたこともあるが、同時に利点も持っていた。それは、あらかじめ分析視角を設定するのではなく漁撈活動の具体的記述を出発点とするために、漁撈の多様な側面について把握できるという点である<sup>2)</sup>。なかでも、日本の漁村を対象とした一連の生態人類学的研究は、漁撈活動の分析を通してきわめて多様なテーマについて論じてきた。たとえば漁撈活動における技能の役割 (Akimichi 1975; 秋道 1977)、漁撈活動の性差 (Irimoto 1972)、漁撈活動の年齢差 (Kuchikura 1975)、漁獲対象に対する認知と漁撈活動との関係 (秋道 1976)、漁種選択のプロセス (寺嶋 1977) などである。また生態人類学以外では、漁場利用に関する地理学的研究 (田和 1997) などにおいて、同様の視点から漁撈活動が取り上げられている。これらの研究では社会や生態系の開放性あるいは動態が看過されていたかもしれないが、そのことは方法論自体の欠陥によるものではあるまい。研究上の欠点はむしろ、ローカルなレベルでの現状を多様な側面から把握するという方法論上の利点を駆使し

てはじめて克服できるだろう（秋道 1995; Scoones 1999）。

本稿のように、漁撈の民族誌的記述を主な目的とした生態人類学的研究もある。たとえば市川（1977）は、宮古諸島大神島における「人間と魚類その他の水族、および海洋学的諸条件（無機的自然）との関係の綱目」を明らかにしようとした。本稿でも、とくに前半部において、漁撈活動における人と自然環境の関わりについて検討する。しかし市川自身も指摘しているように、漁民の暮らしを理解するためには、魚の消費・交換・売却という経済的な側面も視野に入れる必要がある。本稿の後半では、これらの漁撈研究が軽視しがちだった経済的側面をも考慮するため、漁獲量やその処分方法についても詳細に分析する。

## 2 調査地と調査方法

### 2.1 調査地

調査をおこなったのは、マダガスカル共和国トゥリアラ州（Toliara）ムルンベ県（Morombe）ベファンデファ郡（Befandefa）の海岸に位置するアンパンラヴァ村（Ampasilava）である（図1）。この村は県庁所在地ムルンベ市から海岸沿いに約50 km 南に位置し、未舗装道路も通じてはいるが、村民はもっぱらカヌーによりムルンベ市まで移動する。1996年の調査当時、村の人口は約200人、世帯数は38であった。

アンパンラヴァ村の位置する南西海岸部は、島内でももっとも乾燥した地域である。ムルンベ市では年間降水量が453.7 mm、年間降雨日数は32日にすぎない。雨季と乾季の区別は明瞭で、月間降水量が30 mm を超えるのは12月から3月までのわずか4ヶ月である（Griffith and Ranaivoson 1972）。植生としては、乾燥地に適応した植物が優占する有棘林 *ala* (thorn bush) が広くみられる。有棘林の中心部では一般的に農業生産性や人口密度が低く、村落が密集するのは有棘林の周囲に限られる。たとえば有棘林の東縁では人口密度が高いため、海岸から50 km も内陸に位置するにもかかわらず、アンパンラヴァ村で漁獲された魚の消費地として重要である。西側では、海岸から数キロメートル内陸のいくつかの農村と、非漁業人口の多いムルンベ市が魚の消費地となっている。

海岸部の特徴としては、サンゴ礁が発達していることがあげられる。マングキ川（Mangoky）河口から南約70 km 辺りまでは、海岸線近くに発達する裾礁と、陸地からやや離れて海岸線と平行に発達する堡礁が交互に現われる（Pichon 1972）。アンパ

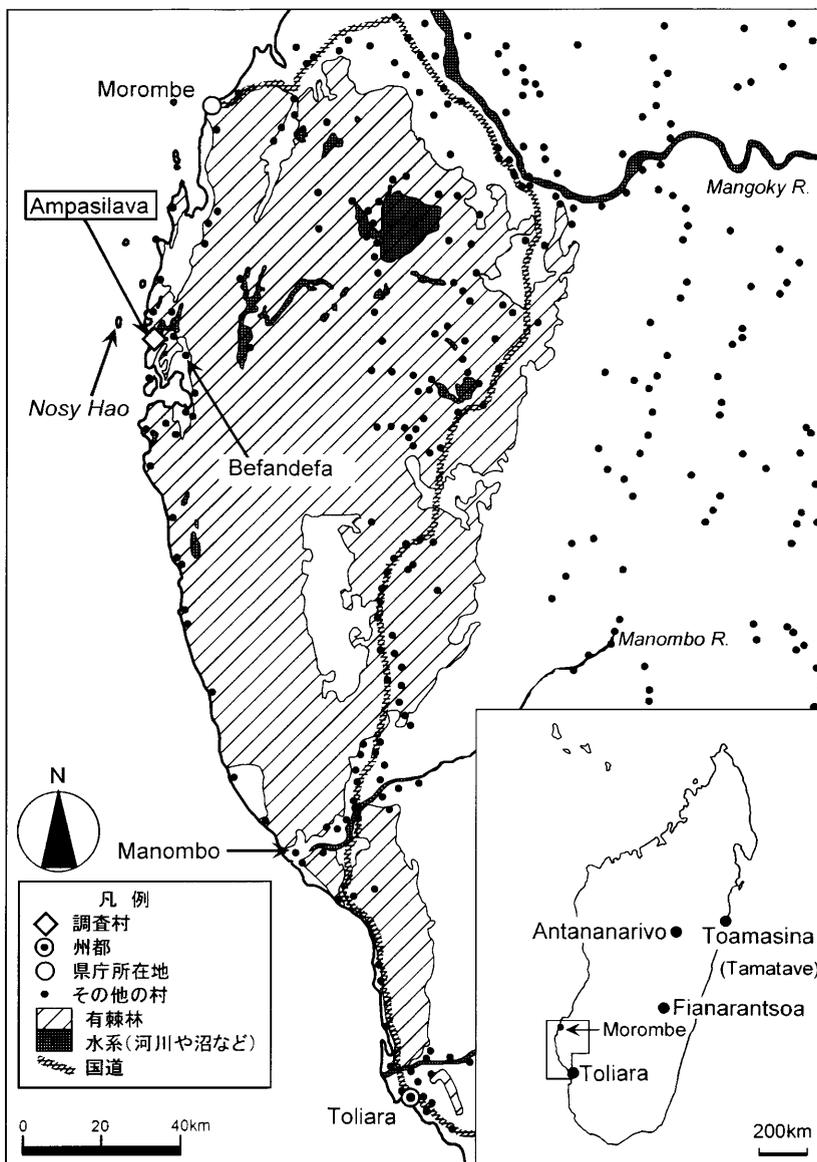


図1 調査地の位置と周辺の村分布  
 Foiben-taosarintanin'i Madagasikara (1990, 初版1964) 発行  
 50万分の1地勢図をもとに作成

シラヴァ村の海岸は砂浜になっているが、約5 km 沖合にあるヌサオ島 (Nosy Hao) までを含む堡礁の一部である。海岸線近くの礁池や礁原のほか、ヌサオ島に至るまでの礁湖、さらに島の外洋側の礁斜面などが好漁場となっている。河川の河口付

近ではサンゴ礁に代わってマングローブ林 *honko* が発達するが、アンパシラヴァ村付近のマングローブ林は小規模であるため、主要な漁場とはなっていない。

アンパシラヴァ村の成人男性の多くは、1990年代初頭以来、140~240 km 離れた遠隔地へ季節的に出かけて漁をおこなうようになった。1995年から翌年にかけての調査では、出漁者の数は成人男性全体の62.5%，平均出漁日数は91.64日にのぼる（飯田2000）。遠隔地では、中華食材として輸出するためのフカヒレやナマコをねらって、大型刺網漁や潜水（素潜り）漁がもっぱらおこなわれる（飯田1998a; 1998b）。これらの漁獲物がもたらす現金収入はきわめて安定しているため、アンパシラヴァ村民は農作物をほとんど自給せず現金購入しながら生活することができる（飯田2001）。遠隔地出漁はヴェズの家計にとってきわめて重要な活動であるが、それについての記述と分析は別稿に譲り、ここでは村の周囲でおこなわれる漁撈活動のみを取り上げる。

## 2.2 調査地における「世帯」と「複合世帯」

ヴェズ社会でもっとも基本的な経済単位は、同じ鍋で調理した食物を分けあう「世帯」である。マダガスカル語ヴェズ方言には世帯に相当する語彙がないが、夫婦と未婚の子供たちから成る核家族がその機能を担っている<sup>3)</sup>。各世帯は、主食となる農作物や副食となる魚、その他生活必需品などをそれぞれに調達しており、家計の単位と考えてよい。また、同じ世帯の者どうしは、食事だけでなく1つまたは複数の家屋 *tsano* を共有してそこに起居する。世帯は、最小の居住集団という側面も持っているといえよう。

いっぽう、漁撈をおこなう場合には、複数の世帯の男たちが協同で作業をおこなって漁獲物を分配し合うことが多い。このような場合でも、世帯が家計や生産の単位であると考えてさしつかえないのだが、いくつかの世帯は、労働力を提供しなかった場合でも他の世帯から漁獲物の分配を受けることがある。このような事実を考慮すると、漁獲物の授受がみられる複数の世帯は1つの単位であり、労働力を共有しているのだと考えた方がよい。この単位の内部では、漁撈に参加する世帯が毎日のように交代するにもかかわらず、必ずといってよいほどすべての世帯に漁獲物が分配される。このような世帯の集合を以下では「複合世帯」と呼ぶことにする。アンパシラヴァ村にある38の世帯は17の複合世帯に分けることができた。その内訳は、5世帯から成るものが2つ、4世帯から成るものが1つ、3世帯から成るものが3つ、2世帯から成るものが4つ、1世帯のみから成るものが7つであった。

消費の単位である世帯が核家族の範囲と一致するのに対し、生産の単位である複合

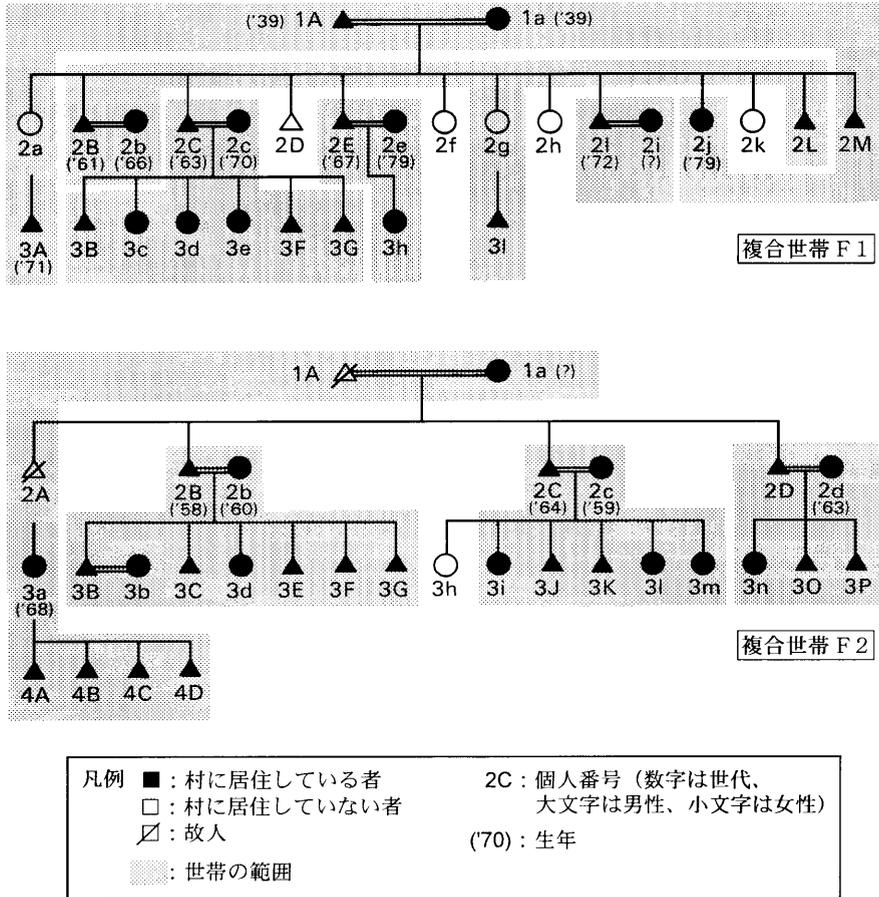


図2 調査対象となった複合世帯の家系図

世帯は、拡大家族といえるような構成をとる。図2は、本稿の後半でとくに詳しく取り上げる2つの複合世帯の系図である<sup>4)</sup>。この図からわかるように、各世帯における夫婦のうち一方は、例外なく他の世帯の一員と親子またはキョウダイの関係にある。しかも、ヴェズ社会一般における夫方居住の傾向を反映して父系的な血縁で結ばれる場合が多い<sup>5)</sup>。このことから、多くの複合世帯は、世帯が成長し分裂する過程で形成すると推測できよう。つまり、世帯の一員である子供たち（多くは息子）が結婚して親の世帯から独立するとき、しばしば親の家屋の近くに新しい家屋を建てる。そして、漁をおこなう際に親やキョウダイの世帯に対して労働力を融通し合ったり、漁獲物を与え合ったりするようになる。いいかえれば、食事など消費の面では親の世帯から独立しても、生産面では複合世帯の一員として活動するのである。キョウダイどうしの

協力関係は親が死んでも維持されるが、次の世代が主要な働き手になれば関係が薄くなり、複数の複合世帯に分裂することが多い。したがって、ほとんどの複合世帯は、1組の夫婦（もしくはその一方）の世帯とその直系子孫の世帯のみで構成される。アンパシラヴァ村では、17の複合世帯のうち16までがこのような構成であり、1例のみが親のない兄妹それぞれの世帯で構成されていた。

### 2.3 調査方法

現地調査は、1995年10月から翌年9月までと、1998年1月から3月までの2回にわたっておこなった。このうち定量的データを収集した時期とその方法は以下のとおりである。

#### ① 直接観察による出漁時間調査

村民の出漁状況を細かく把握するため、村の船着き場を見晴らす丘の上から、漁に出るすべてのカヌーの出入りを観察してその時刻を記録した。期間は、漁撈活動に大きく影響する潮汐の周期が14.7日であることを考慮し、1995年11月11日から25日までの15日間とした。観察は午前5時から午後6時までおこない、観察場所を離れる場合には調査助手が記録を代行した。また、カヌーに乗った者の名前と積み込まれていた漁具を記録し、沖でどのような漁をおこなったかを確認した。おこなった漁法が漁具から不明な場合には、カヌーが帰ってきてから聞き込みによって確認した。

#### ② 出漁聞き込み調査

カヌーの出入りの観察だけでは、カヌーを用いない漁法の頻度を把握することができない。このため、1996年8月1日から14日までの14日間（乾季）と、1998年1月24日から2月6日までの14日間（雨季）、毎日夕方に村中のすべての世帯を訪問してその日の出漁状況を聞き込み、村内の既婚男女がおこなった漁法をすべて記録した。漁への参加者も記録した。

#### ③ 漁獲調査

漁獲効率や漁獲の行方などを具体的に把握するため、図2に示した2つの複合世帯を対象として、漁獲についての観察と測定をおこなった。1996年6月9日から22日までの14日間（乾季）、および1998年1月12日から2月8日までの28日間（雨季）、2つの複合世帯を1日交代で調査したので、それぞれの複合世帯について乾季7日分と雨季14日分のデータを得た。期間中、午前6時から午後6時までを対象複合世帯の敷地で過ごし、構成員が漁に出た時刻と帰ってきた時刻を記録した。また、海から持ち帰っ

た収穫物の数と重量を種類ごとに記録し、どのように分配もしくは交換されたかを記録した。秤量には、携帯用のバネばかりを用いた。

水族の同定においては主として以下の文献に依拠した。魚類に関しては Bauchot et Bianchi (1984), van der Elst (1981), Smith and Heemstra (1991), 益田ほか (1988), 貝類に関してはアボット・ダンス (1985), Dance (1992), 棘皮類に関しては Cannon and Silver (1994)。

### 3 漁法の概要

アンパシラヴァ村でおこなわれている漁法を表1に示した。これらの漁法は、用いる漁具によって3つに大別できる。漁網を用いる網漁、釣糸と釣針を用いる釣漁、ヤスや銚などの刺突具を用いる刺突漁である。このうち、網漁をおこなうことは *mihaza*, 釣漁をおこなうことは *maminta* と呼ばれており、それぞれ独自のカテゴリーとして認知されている。これに対し、刺突漁に対応する語彙をヴェズは持たない。

#### ① 追い込み刺網漁

もっとも一般的な網漁は追い込み刺網漁で、単に「網漁をおこなう」*mihaza* と言ったときにはこの漁法を指す。用いる漁具は長方形のナイロン製漁網 *harata talirano* で、それに木製の浮子（ウキ）*tantava*, 鉛製の沈子（オモリ）*basia*, および適当な

表1 アンパシラヴァ村でおこなわれている漁法

漁の種類	細目*	方法	頻度	従事者の性	潮
網漁 ( <i>mihaza</i> )	① <i>manao harata talirano (mihaza)</i>	追い込み刺網	◎	男性のみ	
	② <i>manandrake harata</i>	置き刺網（浅瀬）	○	〃	大潮
	③ <i>manao drañòke</i>	置き刺網（沖合）	○	〃	小潮
	④ <i>manao harata be</i>	まき網	○	〃	大潮
	⑤ <i>manao jarifa</i>	サメ用刺網	△	〃	
	⑤ <i>mandaro</i>	魚毒漁	△	〃	
釣漁 ( <i>maminta</i> )	⑥ <i>maminta</i>	釣り	◎	男女両方	
	⑦ <i>maminta hale</i>	夜釣り	○	男性のみ	
刺突漁	⑧ <i>mañirike</i>	潜水漁	◎	〃	
	⑨ <i>mihaky</i>	磯釣り	◎	主に女性	大潮
	⑩ <i>mila zanga hale</i>	夜のナマコ漁	○	男女両方	〃
	⑪ <i>mitinotino</i>	舟上からの刺突漁	○	〃	〃
	⑫ <i>mive fano</i>	ウミガメ漁	△	男性のみ	

\* 細目の番号は本文の小節に対応

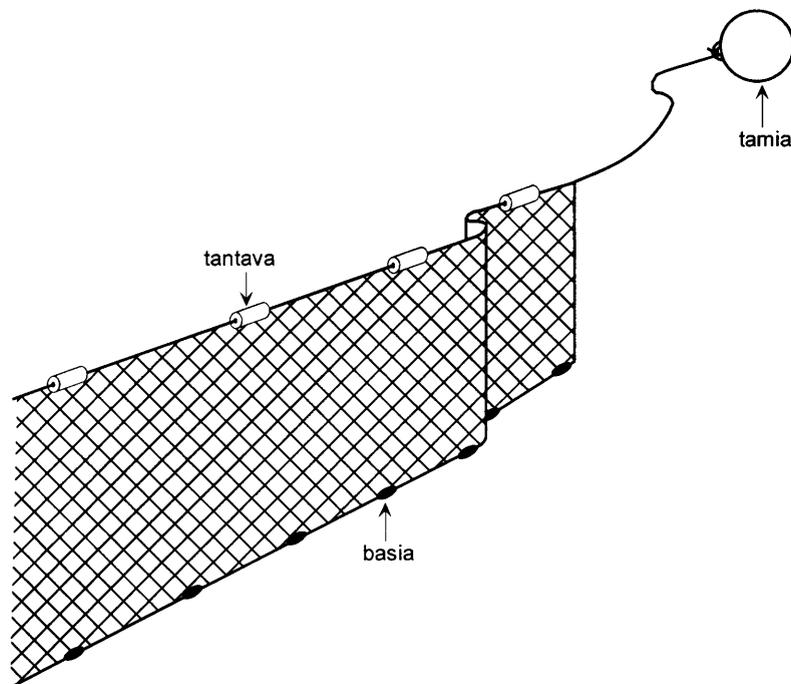


図3 刺網のつくりと部分名称

浮標 *tamia* をつけたものである (図3)。網は高さ 2 m 程度、長さ 100 m 程度で、それを 2～3 枚継ぎ足して用いることもある。網目の目合は 70～100 mm である。この網で捕れる魚は、体長にして 20～30 cm、重さにして 200～400 g 程度のものが多い。漁場となるのは陸地に比較的近い礁池であり、カヌー *laka* を用いてたどり着く。漁撈に用いるカヌーは、右側に舷外浮材のついたシングルアウトリガー式のもので、全長は 2～3 m と小型である (飯田 1998b; 2000)。船外機などによって動力化してはならず、櫂 *five* や棹 *tehe* で漕ぐことによって推進する。

漁は 2～3 人の成人男性によりおこなわれるが、人手不足のときは、成人男性 1 人と女性または子供でおこなうこともある。1 人が網を張る方向にカヌーを進めていき、もう 1 人が進行速度に応じて網を海中に入れていく。網の張り方を上から見ると図 4(a) のようになる。風上に向かってカヌーを漕ぎながら網を入れたのち、最後に渦巻きを描くように網を入れる。このようにして、魚がいそうな場所を囲い込む。次に、カヌーを漕ぐための棹で海面を叩いたり、櫂で船縁を叩いたりして大きな音を出しながら、カヌーを図 4(b) のようにゆっくり進めていく。こうすると魚は驚き、逃げ回るうちに網にひっかかる。魚を脅しながら網を入れ始めた場所まで着くと、そこで網

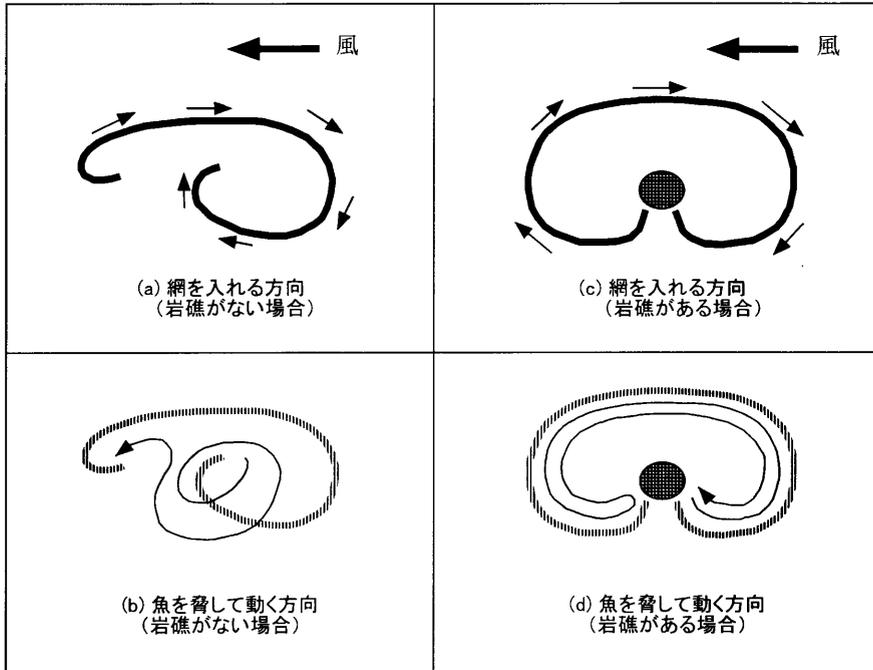


図4 追い込み刺網の広げ方

を上げ始める。1日の漁では、このような網入れが数度繰り返される。なお、この漁法は、魚のすみかである岩礁の周辺でもしばしばおこなわれる。このような場合、図4(c)のように網を張り、図4(d)の経路で魚を脅してから網を上げる。魚がもっとも多くかかるのは網を入れ終えた部分、次いで入れ始めた部分であるという。

ナイロン製漁網が普及する以前は、バオバブ *renala* (*Adansonia grandidieri* Baill.) の樹皮の繊維 *hafotse* や綿糸 *fole* でできた網を用いていた。これらの網は重くて扱いにくかったため、追い込み刺網漁でなく置き刺網漁が主におこなわれていたという。追い込み刺網漁に適した潮は大潮 *famonta* であるが、小潮 *leme rano* の時でも普通におこなわれる。大潮の場合、この漁がおこなわれる時間帯は満潮時 *rano atsike* でなく、魚が深みに集中する干潮時 *rano maike* に限られる。

## ② 置き刺網漁 (浅瀬)

追い込み刺網漁と同じく刺網を用いる漁法である。置き刺網をおこなうことをヴェズの人々は「網を握る」*manandrake harata* と呼び、*mihaza* (追い込み刺網漁) と区別することが多い。しかし、これを広義の *mihaza* (網漁一般) に含めることもあ

る。置き刺網は、低潮時（大潮前後の日における干潮時）に水路となるような、礁原内の浅瀬でおこなう。多くの場合、漁をおこなうのは2人で、そのうちの1人は成人男子であるがもう1人は女性または子供であることもある。まだ潮が満ちているときに海に出て網を張り（*mañary harata* または *mañese harata*）、それが終わるといったん陸に上がる。網を上げる（*mangalake harata*）のは、潮が引いてもう一度満ちてからである。網を上げると、引き潮の潮流に流された魚が網にかかっている。

網は、漁場に応じてさまざまなサイズのものを使うことができるが、実際には追い込み刺網漁で用いる漁網をそのまま用いることが多い。漁場は岸から歩いて行ける距離にあるが、普通はカヌーで出かける。もっぱら大潮前後の日におこなわれるが、ヴェズの男性はこのような「待ちの漁法」を好まないためか、大潮前後でさえ置き刺網をおこなう頻度は少ない。日中に他の仕事で忙しい場合にのみ、夜間に網が設置されるようである。

### ③ 置き刺網漁（沖合）

この漁法は②で述べたものと類似するが、海岸近くの浅瀬でなく礁湖のやや深い場所でおこなう。この網はとくにザヌケ *drañòke* と呼ばれる。ザヌケ漁も「網漁をおこなう」*mihaza* に含まれるが、普通は「ザヌケをおこなう」*manao drañòke* と表現される。ザヌケ漁には、軽いナイロン製漁網よりも、丈夫な木綿製漁網 *harata fole* が好んで用いられる。1996年当時、村で用いられていたザヌケ網は1統だけであった。網の高さは3m程度、長さは200m程度、網目の目合は約80mmであった。漁は成人男性2～3人でおこなわれる。沖合の漁場までカヌーを漕いで行かなければならないため、女性や子供が参加することは少ない。浅瀬の置き刺網と同様、網を張ったあとはいったん陸に戻り、魚がかかるのを待ってから網を上げに行く。ただし、浅瀬の置き刺網と異なり、魚がかかるのは潮流が緩やかな小潮前後の日である。

この漁で捕れる獲物は、先に述べた2つの網漁に比べると大きい魚が多く、1kgを超す魚も少なくない。漁獲を見ると、他の網漁では捕れないヨロイアジ類 *lanora* (*Carangoides* spp.) などが目立つ。しかし漁場が遠いため、この漁は小潮の時でも追い込み刺網漁ほど頻繁にはおこなわれない。

### ④ まき網漁

ミナミキピナゴ *varilava* (*Spratelloides delicatus*)、メアジ *mahaloky* (*Selar crumenophthalmus*)、カマス *mandriandovo* (*Sphyraena* sp.) など、群をなして沿岸に泳いでくる魚を視認したのち一網打尽にする漁法である。用いられる漁具は、刺

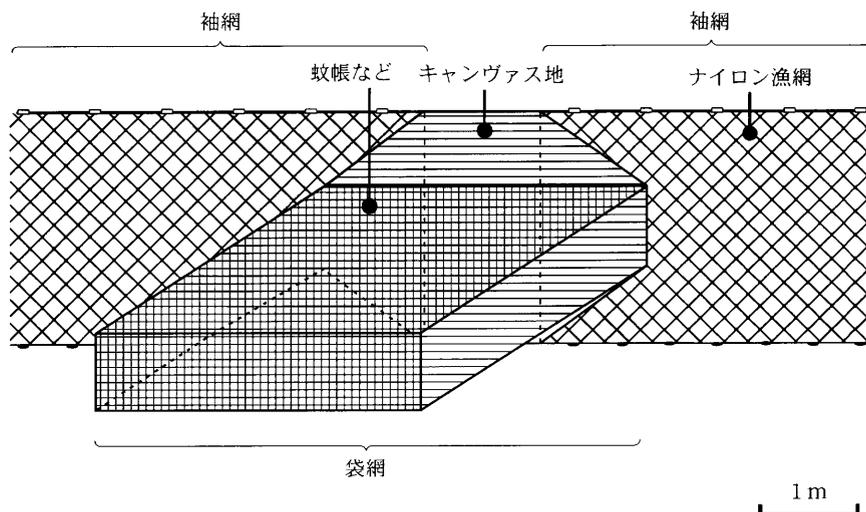


図5 まき網（大網）のつくりと部分名称

網より大型の「大網」*harata be* である。このため、まき網漁をおこなうことを「大網をおこなう」*mana harata be* と言うこともある。だが普通は、捕獲対象に応じて「ミナミキビナゴの網漁をおこなう」*mihaza varilava*、「カマスの網漁をおこなう」*mihaza mandriandovoke* などと言い表すことが多い。

大網は、袋網の部分 *pôsy* (フランス語の *poche* に由来) と、その両側に取り付けられる袖網の部分から成る (図5)。袋網は、魚群をすくってカヌーに引き上げる際に用いるもので、網目の目合はせいぜい 4 mm 程度と細かい。アンバシラヴァ村では、網戸に用いる網 *makarakarà* や蚊帳 *môskitò* (英語の *mosquito* に由来) を用いていた。筆者の計測した大網の袋網部分は、高さ 75 cm、幅 300 cm、奥行き 342 cm であった。袖網は、魚群が逃げないように袋網の方に追い立てるのが目的であるから、必ずしも魚が通り抜けられないような目の細かい網を使う必要はない<sup>6)</sup>。筆者が計測したものは、網目の目合が約 40 mm であった。袋網と袖網の接合部分は、軽くて丈夫なキャンヴァス地を用いる。袖網の高さは、魚群が逃げないようにするため、漁場の水深を超えるものでなければならない。筆者の計測したものは、高さが 226 cm であった。袖網の長さは計測できなかったが、両側を合わせると 100 m には達していると思われる。漁をおこなう際には、成人男子 2～3 人が乗り込んだカヌーが 2～4 艘用いられる。ヴェズのおこなう漁法の中では、比較的大規模とってよい。漁場は、追い込み刺網漁と同様、陸地に近い礁池である。

この漁法は、それぞれのカヌーが互いにある程度の距離をおきつつ、魚群を探索することから始まる。漁の対象となる魚は、体長が3 cm 程度のミナミキビナゴから30 cm 程度のカマスまで大きささまざまなが、いずれも大きな群をつくる点で共通している。魚群を発見したカヌーは速度を上げて魚群に近づくので、他のカヌーもそれを察知して魚群の周りに集まり、魚群を包囲する。カヌーの数が少なく包囲がじゅうぶんでない場合は、カヌーから海に下りて魚群の逃げ道を封じる者もある。魚群が包囲陣の周縁へ向かってくると、近くの者が水面を叩いて大きな音を出し、魚群を中心の方へ追い立てるようにする。このようにして魚群を包囲するいっぽう、大網を積んだカヌーは包囲陣に沿って網を広げていく。魚群を完全に円形で囲むと、他のカヌーの乗組員は海に飛び込み、魚群が逃げないように網をせばめていくのを手伝う。包囲網をどんどんせばめていくと、最終的に袋網の部分に魚群が追い込まれ、カヌーの上に引き上げられることになる。

まき網漁は、大潮前後の日に潮が引いて水深が浅くなってからおこなう。また、魚群発見が必要であるため、海中が見えにくい曇りの日にはおこなわれない。もちろん、たとえ晴れていても魚群が見つからなければ、何も捕ることができない。このように、まき網漁をおこなう条件は刺網漁に比べて限られており、あまり頻繁におこなわれてはいない。

#### ⑤ サメ刺網漁と魚毒漁

この2つの漁法は、アンパンラヴァ村では現在ほとんどおこなわれていない。サメの刺網漁は、1994年から1995年にかけて試験的に近くの海でおこなわれていたが、サメが少ないことがわかって中止され、現在は遠隔地まで出漁しておこなわれる（飯田1998b）。遠隔地でのサメ刺網漁に関しては、別稿で詳しく述べたい。

魚毒漁も、魚が大量死して他の村人の漁獲を減らしてしまうといわれるため、村が大きくなった今ではほとんどおこなわれない。ただし、村の沖合のヌサオ島ではまれに魚毒漁がおこなわれるようである。魚毒に用いるのは、トウダイグサ科の低木 *laro* (*Euphorbia laro* Drake) の樹液である。

#### ⑥ 釣り

釣りをおこなうことは一般に *maminta* と呼ばれる。普通の釣りは、チリメンアイゴ *amboramasake* (*Siganus sutor*) が主な漁獲対象であるため、アイゴ釣り *maminta amboramasake* とも呼ばれる。舟釣りと陸釣りがあるが、いずれの場合もサンゴ礁内部の礁池が漁場である。ナイロン糸と鉄の釣針を用い、釣竿を用いることはない。餌

は、魚やタコの内臓、ホシムシ *maisa* (Sipunculoidea) などである。陸釣りのときには2人以上でおこなうこともあるが、多くの場合、釣りは1人でおこなう。男性だけでなく女性も釣りをする。とくに夫がいない女性は、自家消費用の魚を捕るため頻繁に釣りをする。風がない日の方がよく釣れるというが、少しくらい風がある日にもおこなわれる。

### ⑦ 夜釣り

夜釣りは、フォークカテゴリーのうえでは日中の釣り *maminta* と区別されない。しかし、日中の釣りと夜釣りは、時刻だけでなく漁場や漁獲対象も異なるため、ここでは別の漁法と考えた。漁場は日中の釣りより遠く、外洋に面する深海（礁斜面）で、村からは数キロメートル離れる。このため、成人男性2人以上が大きめのカヌーに帆を張って漁場へ向かうことが多い。漁獲対象はハタ類 (Serranidae) などの大型魚で、5 kg を超すこともあるため、太い釣糸と大きな釣針を用いる。餌は魚の切り身などである。このような夜釣りは少数の者がたまにおこなうにすぎず、ふつう釣りといえはアイゴ釣りなど日中の釣りを指す<sup>7)</sup>。

### ⑧ 潜水漁

背が立たないような深い場所でタコ *horita* (*Octopus* sp.) やナマコ類 *zanga* (Holothuroidea), イセエビ類 *tsitsike* (*Panulirus* spp.), 魚類 *fia* をヤス *voloso* で突く漁法である。成人男子が1~3人で1艘のカヌーに乗って漁場まで行く。このとき、カヌーが流されないように、櫂を使いこなせる子供を連れて行くことが多い。また、漁場によってはカヌーを用いずに歩いて行くこともある。海に潜るときには、水中でもよく見えるように、スキューバダイビングで用いるような水中眼鏡 *mākisy* (フランス語の *masque* に由来) を使う。深いところで潜水漁をするときには、足ヒレを用いる者もまれにいる。ヤスの先端部分の長さは30~40 cm で、柄は2~3 m ほどの軽い木でできている。潜水漁は、風が強く波が立つと、海が濁って獲物が見えなくなるためにおこなわない。波が静まっても、濁りが静まるまでの数日間はおこなわない。

### ⑨ 磯釣り

潜水漁と類似するが、「潜水漁をおこなうこと」*mañirike* と「磯釣りをおこなうこと」*mihaky* は、異なる動詞で表わされて明確に区別されている。磯釣りの漁場は潜水漁のように深い場所ではなく、礁原内部の浅瀬や潮溜まりで、水深はせいぜい膝が浸かる程度である。捕獲対象はナマコやタコ、シラヒゲウニ *soky* (*Tripenustes gratilla*),

貝類などで、捕獲対象によって「ナマコを探す」*mila zanga*、「タコを探す」*mila horita*、「シラヒゲウニを漁る」*mipaike soky*、「ヒザラガイを漁る」*mipaike salabato* などともいわれるが、これらを一括して「磯漁りをおこなう」*mihaky* とも言われる。この漁は、大潮前後の日に潮が引いてサンゴ礁原が干出したときだけおこなう。普通は女性や子どもが何人かで連れだって行くが、そのような一団と離れて成人男性が磯漁りをおこなうこともまれにある。水中眼鏡は用いない。漁具として用いるヤスは、陸上で扱いやすいように1~2mの短いものを使うが、その他の点では潜水漁で用いるものと同じである。

なお、アンパシラヴァ村は村の周囲だけでなく、遠隔地で泊まりがけのナマコ漁をおこなうことがある。これについてはすでに報告をおこなったが（飯田 1998a; 1998b）、より詳細な報告も現在準備中である。

#### ⑩ 夜のナマコ漁

これは磯漁りのバリエーションで、夜間に月明かりや篝火を頼りにナマコを採取する。ヴェズの人々はこの活動を「夜にナマコを探す」*mila zanga hale* と呼び、「ナマコを探す」*mila zanga* ととくに区別していない。実際、両者は、低潮時にサンゴ礁原でおこなう刺突漁という点では共通している。しかし、風が静かな月夜にはナマコが無数に出てきて大量の漁獲をあげられるため、夜のナマコ漁には女性だけでなく男性も大勢参加する。大潮前後で月の明るい夜は月に3~4日ほどしかなく、しかも風が静かで寒すぎないとなると、この漁がおこなえる日は年間でも限られている。

#### ⑪ 舟上からの刺突漁

この漁法は *mitinotino* という特別な動詞で表されるが、「磯漁りをおこなう」*mihaky* の一種であると考えられている。普通の磯漁りと同様、大潮前後の日の干潮時に、サンゴ礁原の近くの浅瀬で舟の上から海底をのぞき、タコやナマコやシラヒゲウニなどをヤスで突いて採る。普通の磯漁りと違い、男性も参加することが多い。

#### ⑫ ウミガメ漁

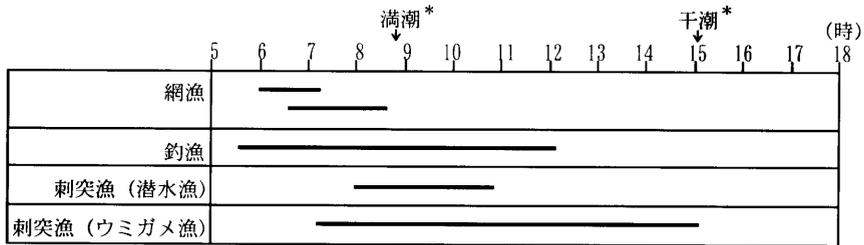
ヴェズの男性にとって、ウミガメ *fano* (Cheloniidae) を捕らえることは大きな名誉である。漁師は、カヌー上からウミガメを発見すると離頭鉈 *teza* を投げつけ、鉈先に結わえたロープでカヌーを引かせて、弱ったところを捕らえる<sup>8)</sup>。アンパシラヴァ村にはかつてウミガメ漁の名人がいたと伝えられているが、現在ではほとんどおこなわれていない。アンパシラヴァ村に住むある男性は、1995年にわずかに数日間では

あるが、他の村から来た姻族にウミガメ漁を習っていた。しかしこの男も、姻族が帰ってしまうとウミガメ漁をおこなわなくなった。

#### 4 漁撈活動の諸側面——活動時間、漁法、同行者の選択

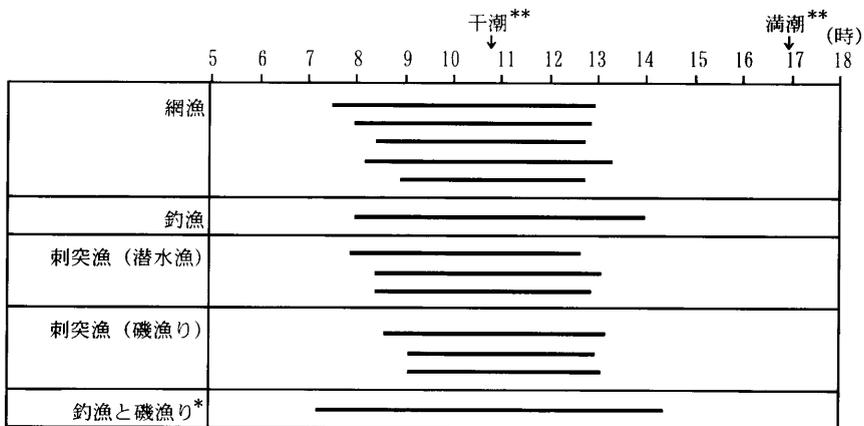
##### 4.1 漁撈活動時間の日変化と月変化

図6に示したのは、小潮近くの日<sup>9)</sup>における全カヌーの出漁時間調査の結果である。網漁を細かく区別してはいないが、大潮近くの日の出漁状況(図7)と比べてみると、漁撈活動時間の違いが明確にあらわれている。まず小潮近くでは、午前中に比較的よく漁撈活動がおこなわれているものの、活動時刻がかなり分散している。いっぽう大潮近くでは、漁法にかかわらず干潮の前後4時間ほどのあいだに漁撈活動が集中して



\* 干潮時刻と満潮時刻はトゥリアラ市の潮汐表による

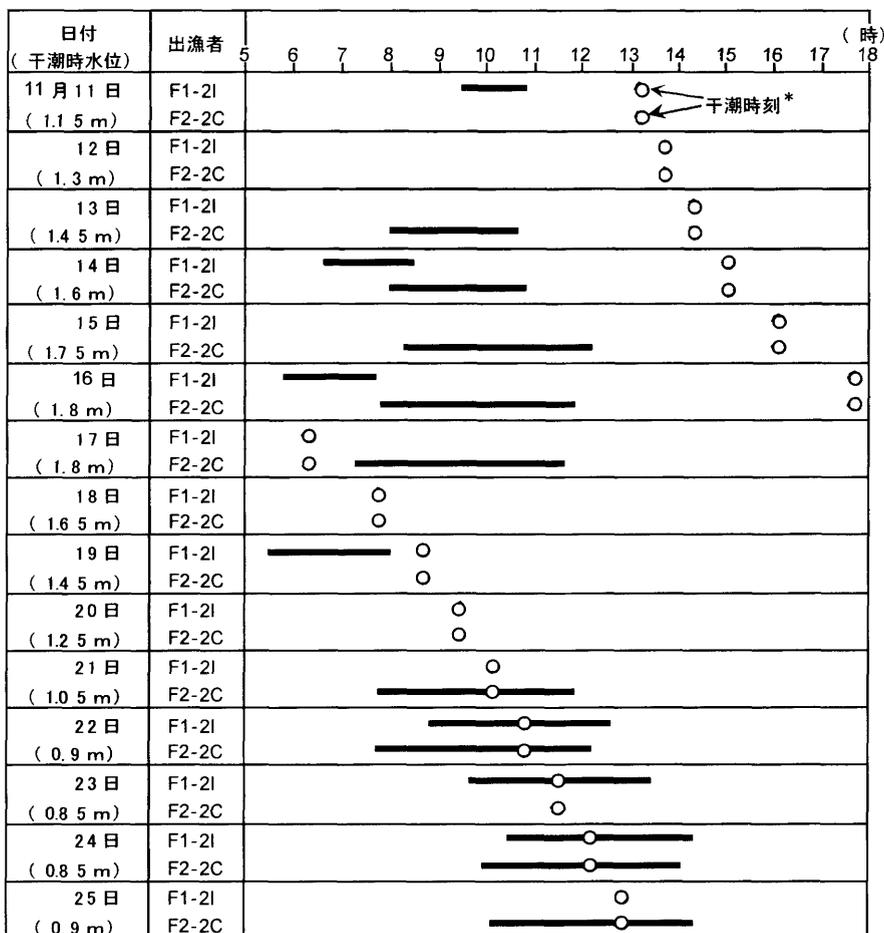
図6 小潮時の出漁時間の例(1995年11月14日)



\* 夫が釣漁に、妻が磯漁りに行ったケース

\*\* 干潮時刻と満潮時刻はトゥリアラ市の潮汐表による

図7 大潮時の出漁時間の例(1995年11月22日)



\* 干潮時刻はトゥリアラ市の潮汐表による

図8 出漁時間の日変化 (1995年)

いる。大潮近くの日に7時間活動していた者もいるが、これは体力の衰えた漁師で、遠くの漁場まで行ったためにカヌーを漕いで漁場を往復するのに時間がかかっていた。しかしこの場合でも、干潮時刻前後に活動している点では他の漁師と共通している。

つまり、小潮が近く1日の潮汐差が小さい日には漁撈活動の時刻が分散し、大潮が近く1日の潮汐差が大きい日には干潮時刻前後に漁撈活動が集中するのである。この傾向は、特定個人の活動時間についても確認できる。図8に示したのは、異なる漁法をおこなう2人の漁師の、2週間における漁撈活動時間の変化である。この図におけ

る個人略号 F1-2I と F2-2C は、複合世帯の略号 (F1 または F2) と図 2 の個人略号の組み合わせである。11月11日から16日にかけては、大潮から小潮へ変わっていく期間で、1日の潮位差が小さくなり干潮時の潮位は高くなっていく。干潮時刻は午後である。17日頃に干潮時の潮位が下がり始めるが、このときは干潮時の潮位が小潮とさほど変わらず、干潮時刻は早朝ないし日没後である。ここまでの期間には、午前中に出漁が多いものの出漁の時刻がまちまちで、出漁頻度も全体的に少ない。ところが、干潮時刻が朝から昼頃になると、この傾向が一変する。干潮時刻に合わせて漁撈活動がおこなわれるようになるのである。この期間が始まるのは干潮時刻が午前8時を過ぎた18~19日頃、終わるのは大潮が過ぎて干潮時刻が午後1時に近い25日頃である。その後、26日頃にはふたたび11日と同様に干潮時刻が午後遅くなるため、ふたたび朝方に漁撈活動がおこなわれるようになる。

このように、大潮前後の日の漁撈が干潮時刻に合わせておこなわれるのは、潮位の低下とともに礁池の魚が深みに集中し、さまざまな漁をおこないやすくなるからであろう。表 1 からわかるとおり、磯漁りやまき網漁は低潮時 (大潮前後の日の干潮時) しかおこなえないし、低潮時以外にも可能な追い込み刺網漁や日中の釣り、潜水漁なども、低潮時の方が作業しやすい。ヴェズたち自身も、漁がしやすいのは潮位が低い時 *rano maike* そして浅い場所 *rano marivo* であるという。いっぽう小潮前後になると、水位があまり下がらず、沖合の置き刺網以外の漁法では条件が悪くなるため、総じて漁撈が活発でなくなるのである。

## 4.2 出漁日数と漁法選択に関する性差

図 9 は出漁調査の結果をまとめたもので、調査した14日間の出漁日数を示している。聞き込みはアンパシラヴァ村の既婚男女すべてを対象としたが、この期間に7日以上村に不在だった者は分析から除外した。これを見ると、7日 (2日に1度の割合) 以上漁に出る者は、女性より男性に多いことがわかる。また、平均出漁日数も男性の方が多い。乾季には、男性の平均出漁日数が5日であるのに対し、女性は3.96日であった。また雨季には、男性の平均出漁日数が5.88日、女性は2.37日であった。とくに雨季における男女差は、統計的にも有意であった (Mann-Whitney's *U*-test.  $U=303.5$ ,  $n_1=40$ ,  $n_2=39$ ,  $z=-4.67$ ,  $p<0.001$ .)。

男女の性差は、出漁日数だけでなく、選択する漁法にもみられる。表 2 は、全出漁日数のうち、各漁法をおこなった日数の割合を示したものである。同じ日に1人で2つの漁法をおこなった場合、それぞれの漁法をおこなった日数を0.5日として数えた。

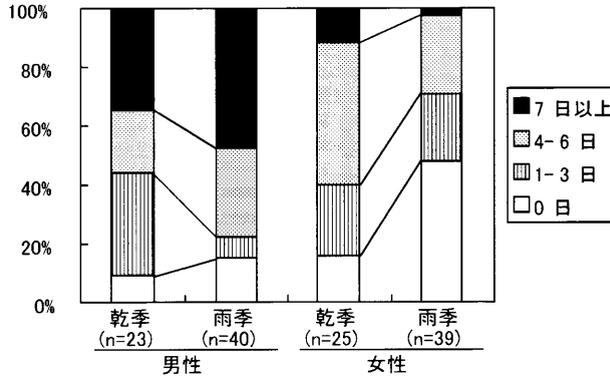


図9 既婚男女の出漁日数の季節変化（14日間）

これを見ると、男性は追い込み刺網漁をはじめとして、まき網漁、釣り、潜水漁など、さまざまな漁をおこなっている。これに対し、女性がおこなう漁の種類は限られている。比較的頻度が高いのは磯漁りで、他には釣りと追い込み刺網漁だけであった。追い込み刺網漁に参加する女性は、ほとんどの場合夫の漁を補佐するだけなので（後出表3参照）、女性だけでおこなうのは磯漁りと釣りだけだと考えてよい。これらはいずれも、カヌーを用いなくても漁場にたどり着ける漁法である。毎回のようにカヌー

表2 各漁法がおこなわれた割合（14日間，単位：%）

	男性		女性	
	乾季	雨季	乾季	雨季
対象人数	23人	40人	25人	39人
追い込み刺網	44.0	43.0	12.9	11.1
置き刺網（浅瀬）	1.9	3.6	-	-
置き刺網（沖合）	3.2	-	-	-
まき網	15.7	13.6	-	-
釣り	16.7	1.3	-	9.3
夜釣り	-	4.5	-	-
潜水漁	8.3	31.1	-	-
磯漁り	6.9	3.0	87.1	79.6
夜のナマコ漁	-	-	-	-
舟上からの刺突漁	3.2	-	-	-
合計	100	100	100	100
のべ出漁日数	108日	235日	85日	81日
平均出漁日数	5日	5.88日	3.96日	2.37日

で漁場までおもむいてその日の条件に応じてさまざまな漁をおこなうのは、主に男の仕事であるといえよう。アンパンラヴァ村民も、それが男の仕事 *asan-johary* であり女の仕事 *asani-ampela* ではないと考えている。

このように調査地では、出漁日数からみても漁法の多様性からみても、男性を中心に漁撈活動がおこなわれ、女性の漁は家事の合間におこなわれる傾向が強いといえる。

### 4.3 出漁日数と漁法選択に関する季節差

出漁日数と漁法に関する資料は、漁撈活動の性差だけでなく季節差をもあらわしている。まず、男性の平均出漁日数が雨季に若干多くなっている。これは、天候不順の雨季になると、乾季に遠隔地まで出漁していた働き盛りの男性が村へ帰ってくるためである。調査対象となった男性の数が雨季に多いのも同じ理由による。いっぽう、女性の平均出漁日数は乾季で3.96日、雨季で2.37日と乾季に多く、この差は統計的にも有意である (Mann-Whitney's *U*-test.  $U=267.5$ ,  $n_1=25$ ,  $n_2=39$ ,  $z=-3.027$ ,  $p<0.005$ )。その理由としては、雨季になって出漁先から夫が帰ると家事が増えること、夫が漁に出るので妻は出漁する必要がないことなどが考えられるが、より根本的には、女性が漁にあまり熱心でなく些細な理由によって漁に出たり出なかったりすることがあげられる。これについては6.1で詳しく述べたい。なお、調査対象となった女性の数が雨季に多いのは、夫が出漁している乾季に実家の村へ帰る妻がいるためである。

漁法の季節差は表2から検討できる。男性におけるもっとも大きな季節差は、雨季には潜水漁を頻繁におこなうことである。この差は統計的にも有意である ( $\chi^2$ -test.  $\chi^2=20.96$ ,  $df=1$ ,  $p<0.001$ )。これは、潜水漁の担い手である若者たちが雨季に遠隔地出漁から戻ってくるためである。その他の点では、乾季と雨季にほとんど違いはない。沖合の置き刺網漁や舟上からの刺突漁は雨季におこなわれていないが、これは季節差というより、サンプル数が少ないことによる統計上の誤差というべきであろう。これらの漁法が乾季におこなわれる割合は、全出漁回数の3%程度にすぎない。

以上のように、漁撈活動の季節差は、資源や漁撈条件の季節変化によるのではなく、主として季節的な遠隔地出漁の有無により生じている。アンパンラヴァ村でおこなわれる各漁法は、特定の季節に限られるものではない。これは、アンパンラヴァ村民たちの意見にも一致している。

### 4.4 同行者の選択

多くの漁法は、複数の漁師による協同作業を必要とする。どのような者を同行者

表3 2人で出漁した場合の同行者同士の関係(1)

	追込刺網	置刺網 (浅瀬)	潜水漁	船からの 刺突漁	潜水漁と 磯漁り	その他	合計
① 夫婦	20	-	-	-	6	-	26
② 親子	14	1	1	-	-	-	16
③ 兄弟	16	-	7	4	-	-	27
④ 父方オジ-甥	5	1	2	1	-	-	9
⑤ 母方オジ-甥	4	1	-	-	-	-	5
⑥ 父方平行イトコ	-	-	-	-	-	-	0
⑦ 母方平行イトコ	-	-	-	-	-	-	0
⑧ 交叉イトコ	2	-	1	-	-	-	3
⑨ 舅-婿	3	-	-	-	-	-	3
⑩ 小舅-婿	2	-	-	-	-	1**	3
⑪ <i>mpirahalahy</i> *	-	-	8	-	-	-	8
⑫ その他	4	-	8	-	-	-	12
⑬ 不明	-	-	-	-	-	1***	1
合計	70	3	27	5	6	2	113

\* *mpirahalahy*の原義は「兄弟」「従兄弟」であるが、ここでは、それぞれの妻が実の姉妹である2人の男という意味で用いている。

\*\* 釣りによる。この事例においては構成員がともに女性なので、正確には「小姑-嫁」関係にある。この例と、夫婦で出漁した例以外は、いずれも男性ばかりで出漁した。

\*\*\* まき網による。村外在住者と漁をおこなった事例。

*nama*<sup>10)</sup>として選ぶかという問いに対してアンパシラヴァ村の人々は定まった答え方を持っていないが、出漁聞き込み調査で得られた事例<sup>11)</sup>から一定の傾向を読みとることができる。表3は、聞き込んだ159事例のうち2人で出漁した113例において、同行者どうしがどのような親族関係にあったかを示したものである。聞き込み調査は合計28日間と短く、すべての漁法についてじゅうぶんな事例が得られたわけではないので、漁法ごとの比較はできない。しかし、いずれの漁法をおこなう場合でも、ごく近い親族の中から同行者を選んでいることがわかる。比較的多いのは、同行者が夫婦(表中①)または親子(同②)、兄弟(同③)の場合であり、これらの事例だけで全体の62%を占める。「その他」として示した12例に関しても、同行者の間には親族関係がみられた。すなわち、12例のうち5例では一方の漁師の従兄弟の息子(MBSS)、5例では妻の従兄弟(WFBS)、残りの2例では妻の従兄弟の息子(WFZSS)が、同行者として選択されていた。

表4は、同じ事例群を別の観点から集計したものである。すべての漁法を一括し、2人の同行者が同じ世帯に属するかどうか、同じ複合世帯に属するかどうか、そして

表4 2人で出漁した場合の同行者同士の関係(2)

	世帯が同じ	世帯は異なるが 複合世帯が同じ	複合世帯は異なる が同じ村に居住	異なる村に居住	合計
① 夫婦	26	-	-	-	26
② 親子	7	8	-	1	16
③ 兄弟	4	16	5	2	27
④ 父方オジ-甥	-	8	1	-	9
⑤ 母方オジ-甥	-	5	-	-	5
⑥ 父方平行イトコ	-	-	-	-	0
⑦ 母方平行イトコ	-	-	-	-	0
⑧ 交叉イトコ	-	2	1	-	3
⑨ 舅-婿	-	2	-	1	3
⑩ 小舅-婿	-	-	3**	-	3
⑪ <i>mpirahalahy</i> *	-	-	-	8	8
⑫ その他	-	-	5	7	12
⑬ 不明	-	-	-	1	1
合計	37	41	15	20	113

\* *mpirahalahy* の原義は「兄弟」「従兄弟」であるが、ここでは、それぞれの妻が実の姉妹である2人の男という意味で用いている。

\*\* このうちの1例と夫婦で出漁した26例以外は、いずれも男性ばかりで出漁した。

同じ村に居住するかどうかを区別した。表を見ると、ほとんどの場合、同じ世帯か複合世帯の中から同行者が選ばれていることがわかる。このうち、男女で出漁した場合の27例(表中①の26例と⑩の1例)を除き、男性だけで出漁する場合を考えると、世帯は異なるが複合世帯が同じ者どうしで出漁する場合が大半であるといえる。

しかし、異なる複合世帯の者たちが協同して漁をおこなう例も少なくない。とくに、異なる村に住む親子や兄弟、姻戚関係によって結びつく者などは、互いに村を訪問するたびに漁に同行している。また、同じ複合世帯の者が漁に同行できない場合には、同じ村に住みながら複合世帯を異にする者と同行することがある。後者の事例15例のうち男だけで出漁したのは14例で、このうち一方の漁師が複合世帯で唯一の成人男性というケースが4例、一方の漁師の複合世帯には他の成人男性が1人しかいないというケースが9例あった。つまり、複合世帯を異にする者どうしが出漁する事例は、一方の漁師の複合世帯が小さく同行者を見つけにくい場合や、村外から親族が訪ねてきた場合に多いといえる。

この傾向は、3人で出漁する場合にもみることができる。表5に示したように、多くのケースでは3人全員が同じ複合世帯に属しているか、同じ複合世帯に属する2人

表5 3人で出漁した場合の同行者同士の関係

		追い込み刺網	まき網	潜水漁	合計
全内に 全員が居 村住	全員同じ複合世帯	8	-	3	11
	1人が異なる複合世帯	-	-	1	1
	全員異なる複合世帯	1	-	1	2
村外居住者1人を含む*		8	-	1	9
" 2人を含む		1	2	1	4
合計		18	2	7	27

\* この場合、村内に居住する2人はいずれも同一の複合世帯に属していた。

表6 4人以上で出漁した場合の同行者同士の関係

(漁法) (出漁人数)	潜水漁	まき網					合計
	4人	4人	5人	6人	7人	10人	
全員が同じ複合世帯	1	3	2	-	-	-	6
1つの複合世帯と村外居住者	-	1	3	4	-	-	8
2つの複合世帯と村外居住者	2	-	-	-	1	1	4
合計	3	4	5	4	1	1	18

が村外からの訪問者と出漁していた。訪問者を含む事例のうち、村内居住者と訪問者との関係が不明な3例を除く10例においては、村内居住者と訪問者は兄弟 *mpirahalahy*<sup>12)</sup>か、姉妹の配偶者 *velahy* という関係にあった。これに対し、同じ村に居住する2つ以上の複合世帯が協力して漁をおこなうことは少なかった。また、表6に示したように、4人以上で出漁した場合も傾向が同じである。まき網漁では、村外からの訪問者を交えつつも、同じ複合世帯に属する者が一緒に漁をおこなう傾向が顕著だった。2つの複合家族が協力していたのは、出漁人数が7人以上と多くなった場合のみだった<sup>13)</sup>。

以上から、アンバシラヴァ村においては、複合世帯の内部から漁のパートナーを選ぶ傾向が強いといえる。また、親族や姻族として村外から訪問する者は訪問先の複合世帯の成員に準じ、頻繁に同行者として選ばれる。これに対し、同じ村の異なる複合世帯の者どうしが漁に同行するのは、複合世帯の規模が小さく漁に同行する成人男性がいない場合に限られる。しかしこの場合も、同行者は親族であることが多い。

## 5 漁獲の分配と消費・流通

### 5.1 漁獲の分配

漁を終えて帰ってきた漁師は、近くにいる漁師仲間や子どもたちの力を借りて、汀線と集落の間にカヌーを上げる。漁獲の分配はその直後から始まる。まず、10才未満くらいの子どもたちが集まってきて、10 cm 程度の小魚をとる。種類でいえば、ムラサメモンガラ *tsontsò* (*Rhinecanthus aculeatus*), シマハギ *andralame* (*dabandriake*) と呼ぶ; *Acanthurus triostegus*) などのカワハギ類やオヤビッチャ類 *tsaborokodò* (*mangalakaofa* と呼ぶ; *Abdefduf* sp.), チリメンアイゴの幼魚などである。子どもたちが大きな魚をとったり、1人だけたくさんの数をとったりするのでなければ、たいていの漁師はこれを見過ごす。このとき集まってくる子どもたちは、出漁者の子か甥・姪<sup>14)</sup>にあたる。父や兄、オジ以外の漁師から子どもたちが魚をとることはほとんどない。

次に浜売りが始まる。このときに魚を買うのは、副食を求める近隣農村の人たちや、50 km 内陸の豊かな農業地帯まで行って魚を売る行商人たちである。近隣農村の人たちはせいぜい2~3 kg を購入するにすぎないが、行商人は一度に数十キログラムも買い付けることがめずらしくない。また、時にはアンパンラヴァの村人も魚を買う。これは、成人男性が遠隔地出漁のために留守をしていて魚が手に入らない場合などである。このような買い手がいれば漁獲の大部分は浜で売却されてしまうが、買い手は定期的に訪れるわけではない。また、魚の水揚げが少ない刺突漁の場合や、獲物が少ない場合などにも浜売りはおこなわれない。漁師自身が「魚はいないよ (*Tsy misy fia*)」, 「(魚を) いくらも殺さなかったよ (*Tsy namono firy*)」と言えば、買い手の人々はおとなしく次のカヌーを待たなければならない。

浜売りで最初に売れるのは、大量に水揚げされることの多いチリメンアイゴやツッパリサギ *ambariake* (*Gerres acinaces*), そして「白魚 *fiam-poty*」と総称されるフェフキダイ類 (*Lethrinus* spp.) である。これにはマトフェフキ *tapaporoha* (*L. harak*), シモフリフェフキ *angelike* (*L. lentjan*), ハマフェフキ *ambitsy* (*L. nebulosus*) などが含まれるが、味が似通っているためにひとまとめに扱われる。浜売りでは、魚は種類にかかわらずキログラム単位で取り引きされる。1994年暮れから1998年初めにかけてこの価格はまったく変動せず、1,000FMG/kg<sup>15)</sup>であった。ただし、魚は必ず

しも秤量するとはかぎらず、目分量にもとづいて金額が支払われることもある。時にはおまけ *kadò* (フランス語の *cadeau* に由来) がつくこともある。

浜売りの前後に、カヌーを海から上げるのを手伝った者に対して無償で魚を分け与えることがある。とくに、筆者や学校教師など村に長期滞在する者や、他の村の親族などに対して、比較的頻繁に分配がなされる。また、まき網漁の大漁時などは、多くの者が駆けつけて当然のように魚を持ち去っていくが、漁師もこれを見過ごす。しかし、漁師の説明によると、このような分配はあくまで漁師自身の好意によるもの (*sitsam-po*) で、義務づけられているわけではない。浜売りと分配の後、漁師の妻や姉妹がカヌーの中から魚を出す。この魚は、漁師自身の家に持ち込まれるか、魚加工をおこなう漁師のもとへ持ち込まれる。

漁師自身の家では、複合世帯を構成する世帯に対して魚が分配される。漁法の種類や漁獲高によっては分配がおこなわれないこともあるが、網漁をおこなった場合には、漁に参加しなかった構成世帯に対してもほぼ確実に分配がおこなわれていた。この分配は、漁師自身がおこなうこともあれば妻や姉妹がおこなうこともある。また、漁に参加しなかった世帯の者が分配することもある。同じ日に漁をおこなってじゅうぶんな取り分をすでに確保した者は、「魚はいらないよ (*Tsy mila fia*)」と言って分配を辞退する。しかし、魚をもっと食べたいと思えば、2度以上の分配にあずかることもできる。分配された魚はそれぞれの世帯において調理され、他の者に売ったり売却用に加工したりすることは決してない。売却用に魚を加工する者は、たとえ漁をした者の親や子やキョウダイでも、自家消費分以外の魚は現金で購入しなければならない。

複合世帯の内部で消費しきれない魚や美味とされない魚は、魚加工をする漁師のもとへ持ち込まれ、背中側を切り開いて塩魚に加工される。魚加工をする漁師は、ある程度の大きさであればどんな種類の魚でも、またいかに大量でも引き取るが、買い取り価格は浜売りより安い。買い取り価格は、1996年にはほぼ 800FMG/kg で一定していたが、ムルンベ市での塩魚の価格に応じて上下するため、1998年初頭には 500FMG/kg まで下がった。筆者の滞在期間を通じて魚加工をおこなっていた世帯は2つあったが、このほかにも、一時的に資金のある漁師が短期間だけ魚加工をおこなうこともある。また、資金が多くないので、ごく近い親族の捕った魚だけを買って加工する場合もある。調査対象となった複合世帯 F1 の男性 2A (前出図 2) も、他の漁師による漁獲を頻繁に買い上げ、塩魚に加工していた。彼は、同じ複合世帯の者から魚を買い上げる場合にも、同じ単価で計算した金額を支払っていた。魚を売却して得た現金は、出漁した者たちの間で均等に分配することが多いようである。

## 5.2 魚の加工・調理と流通

自家消費のための魚の調理は、簡単なものが多い。子どもが持ち帰った小さな魚は、単に熾き火で焼く (*atono*) だけで間食にされる。おかず *laoke* として魚を調理する際には内臓を取り出し、塩を加えて水煮にする (*ketsehe*) か、少量の油で揚げる (*endaze*)。まれに、タマネギやカレー粉と一緒に軽く揚げたのち、水を加えて煮込むこともある。これはカレー煮 *kary* と呼ばれる。また、テングハギ *fiantzifa* (*Naso unicornis*)、ゴマモンガラ *botsanza* (*Balistoides viridescens*)、モヨウフグ *botàña* (*Arothron* sp.)<sup>16)</sup>、サメ類 *akio* (Carcharhinidae) など肝臓の大きな魚は、しばしば *hosy* という料理の素材に用いられる。この料理は、茹でてほぐしておいた魚肉を肝油にからめたものである。

数日程度の保存のためには、魚を燻製にする (*asale*)。これは、内臓を取り出した魚を背中から二枚に開いて数尾ずつ串に刺し、焚き火の周りに置いて燻すというものである。焚き火に近づけすぎず、長時間燻すのがよいとされる。魚体が小さく火が通りやすい場合には、魚は丸ごと串に刺す。燻製は、魚が多すぎて一度に食べきれない場合に用いられる。また、有棘林の東方まで魚を売りに行く行商人も、浜で買った大量の魚を燻製にする。まれに、漁師自身が捕った魚を燻製にし、県庁所在地のムルンベ市まで運んで売ることがある。しかし、消費分を超える魚は、ただちに、魚加工をする漁師に売却されることが多い。

魚加工をする漁師は、買い取った魚をすべて塩魚に加工する。魚は二枚に開いて塩と一緒に一晩寝かせたのち、昼は天日に乾燥させて夜は塩に漬ける。これを1週間繰り返すと、数ヶ月の保存にも耐えるようになる。1996年には、800FMG/kgの鮮魚が塩魚に加工されてムルンベ市に運ばれ、3,000FMG/kgで売られていた。また、魚の値段が暴落した1998年には、鮮魚が500FMG/kg、加工された塩魚が1,500FMG/kgであった。鮮魚の内臓を出して塩魚にすると重量が約60%に減ることから、魚加工をする漁師の利潤率は80~125%と計算できる<sup>17)</sup>。村で加工された塩魚は、フィアナランツア州出身者やインド系商人 *karany* など別の仲買人がムルンベ市で買い付ける。塩魚の大部分は、ここから陸路で280 km離れた州都トゥリアラ市 (Toliara; 前出図1)、そこからさらに540 km離れたフィアナランツア州の州都フィアナランツア市 (Fianarantsoa) に運ばれる。1998年初めのフィアナランツア市における塩魚の価格は、魚の種類にもよるがほぼ5,000FMG/kgだった。塩魚はここからフィアナランツア州の他の町や村、さらには首都アンタナナリヴ市 (Antananarivo) に運ばれて消

費される。

このほか、とくにチリメンアイゴなどの魚は干物にされる (*vendrane*) こともある。背中から三枚に開いてさらに切れ目を入れ、天日で乾燥させるのである。干物の保存期間は塩魚より短いが燻製より長いので、長期の航海中の食料や、他の村に住む知人へのみやげとして利用される。干物が売買されることはほとんどないが、かつては遠方の農業地帯で農作物と物々交換されていたという。

### 5.3 特殊な海産物の加工と流通

ミナミキビナゴはサイズが小さいものの商品としては重要で、砂浜で天日乾燥してから出荷される。ムルンベ市のインド系商店まで持って行って売ることもあるが、大魚の日が続くと、ムルンベ近辺に住む仲買人が聞きつけてわざわざ村まで買い付けに来る。1998年初頭には、乾燥ミナミキビナゴの価格は 3,780FMG/kg であった。この魚を乾燥すると重量が20%に減少することから、鮮魚の価値は約 750FMG/kg と計算できる。ある仲買人によれば、乾燥魚はムルンベ市からムルンダヴァ市 (*Moron-dava*) へ運ばれ、外国の援助によって近年始まった牧畜プロジェクトの牧場で牛の飼料に混ぜられるという。

タコは、一般の魚と同様に加工をおこなう漁師に売却される。買い取り価格は 1,000FMG/kg 前後であるが、安いときには 500FMG/kg (1998年初頭)、高いときには 1,700FMG/kg (1996年8月) と変動が激しい。低価格のときには、タコはほとんど売却されず自家消費される。売却されたタコは内臓を出して干物にし、ムルンベ市でインド系商人などの別の仲買人に売られる。タコはさらに陸路で運ばれ、トゥリアラ市近辺の市場で売られる。

ナマコも、加工をおこなう漁師に売却される。内臓を出したのち煮沸して天日乾燥し、ムルンベ市で別の仲買人に売られる。ここからさらに、州都トゥリアラ市、首都アンタナリヴ市へと売り渡され、最後には外港トゥアマシナ港 (*Toamasina*) からシンガポール・香港などへ輸出される。これらの華人文化圏において、ナマコは中華料理の食材として珍重されている。

イセエビは冷凍保存する必要があるため、村の漁師には売却されず、アンパシラヴァ村から5km北の浜辺でバンガローを経営するインド系商人に売却される。買い取り価格は 30,000FMG/kg 前後であるが、これはイセエビ重量の約30%にあたるむき身の価格なので、頭つきの価格は 9,000FMG/kg と換算できる。購入されたイセエビはバンガローの冷凍庫にいったん保管されたのち、ムルンベ市へ運ばれる。ムルンベ市か

ら首都アンタナナリヴ市へは空輸され、フランス料理店や中華料理店などに買い取られる。

以上のように、魚類以外の海産物は、ほとんどすべてムルンベ市を經由して村外へ出荷される。ムルンベ市は、付近の漁村からあらゆる海産物が集中する市場であるといつてよい。ムルンベ県一帯のヴェズたちは、これら海産物の出荷や買出しのため定期的にムルンベ市を訪れる。親しい知人や親戚がムルンベに在住していればそれらを頼ることが多いが、そうでない者は海岸の一角にテントを張ってキャンプ生活をしながら商店を回り、時には他の町との間を往復する仲買人を見つけて交渉を重ねる。仲買人の中にはアフリカ大陸や東南アジア方面から来る者もあり、筆者もその1人と間違われて何度も声をかけられた。国内の他地域から来た仲買人の中には、いつでも商品を買付けられるようムルンベで新たに店を開いた者もある。

魚類以外の海産物のうち、ムルンベに運ばれず村内で消費されるのはウニくらいであろう。ウニは、殻を割って取り出した卵巣を数十個分まとめて円盤状に焼き、適当な大きさに切って売られる。主として空腹を抱えた漁師たちがウニの卵焼きをスナックとして食べるが、村における需要はそれほど多くない。浅瀬や潮溜まりには捕りきれないほどのウニが散在しており、主として老人たちがそれを集めている。

## 6 漁撈活動と家計

### 6.1 全体的な労働投入量

次に、漁獲調査をおこなった2つの複合世帯の事例から、家計に対する漁撈活動の寄与を見てみよう。まず労働投入量に関して、2つの複合世帯が出漁した頻度を表7に示した。第一にわかるのは、女性は磯漁りを中心におこない、時おり男性の追込刺網漁を補佐するという、本稿4.2で指摘した傾向がここでもみられることである。第二に、F2の男性が中心となった漁についてみると、調査時期によって漁法が顕著に異なっている。すなわち、乾季に多かった釣りや潜水漁が雨季にはほとんどおこなわれず、刺網漁が多くおこなわれるようになっていく。このような違いは、実は季節的要因によるのではなく、乾季の調査が終わった後にF2の男性が漁網を購入し、雨季の調査時には網漁を集中的におこなっていたことによる。

労働投入に関するさらに詳細な傾向は、表8から読みとった方がよい。先の表のように出漁頻度を指標にすると、多人数でおこなう漁法と1人だけでやる漁法を同じ1

表7 各複合世帯による漁撈活動の頻度

複合世帯		F1		F2	
		乾季	雨季	乾季	雨季
調査時期		7日間	14日間	7日間	14日間
調査日数		7日間	14日間	7日間	14日間
男性の漁	追込刺網漁	5(1)*	8(1)*	-	10(2)*
	置き刺網漁(浅瀬)	-	-	-	5
	まき網漁**	-	5	-	-
	釣漁	-	-	6	-
	潜水漁	-	-	5	1
小計		5(1)*	13(1)*	11	16(2)*
女性の漁	磯漁り	5	1	2	3

\* ( )内は、女性が参加した回数。

\*\* まき網漁をおこなっている間に置き刺網漁を仕掛けて魚がかかるのを待つ場合があったが、これらはまき網漁の一環として扱った。

表8 各複合世帯が漁撈に投入した労働量(14日間, 単位:人・時間)

		F1		F2	
		乾季*	雨季	乾季*	雨季
男 性	追込刺網漁	75	30.32	-	62.47
	置き刺網漁	-	-	-	13.57
	まき網漁	-	45.97	-	-
	釣漁	-	-	46.8	-
	潜水漁	-	-	44	2.47
小計		75	76.28	90.8	73.52
女 性	追込刺網漁	7.43	2	-	4.98
	磯漁り	28.6	3	11.4	5.42
	小計	36.03	5	11.4	10.4
複合世帯以外の者**	追込刺網漁	8.13	8.35	-	-
	まき網漁	-	5.18	-	-
	小計	8.13	13.53	0	0
合 計		119.23	94.82	102.2	83.92

\* 乾季の調査期間は7日間だったので、すべての値を2倍して14日間分に統一した。

\*\* F1の者にとって姻族にあたり、1例を除いて他村在住者。本文を参照。

回として数えてしまい、実際の労働量を反映しないからである。また、先の表では乾季の調査日数と雨季の調査日数が異なっていたため、表8では14日分の労働投入量に換算した。

この表を見てまず気づくのは、F1では複合世帯以外の者が漁に参加していることである。乾季には、他村へ嫁いだF1-2f(前出図2)の夫が追い込み刺網漁に1回参加し、雨季には、F1-2fの夫が追い込み刺網漁に1回とまき網漁に2回、他村へ嫁いだF1-2gの夫が追い込み刺網漁に1回、他村へ嫁いだF1-2hの夫の弟(他村在住)が追い込み刺網漁に1回、アンバシラヴァ村に住むF1-2jの婚約者がまき網漁に1回、それぞれ参加している。つまり、複合世帯の外から労働力を得た漁7回のうち6回における「協力者」は、ふだん他村に在住している。彼らは、F1の労働力不足を補う目的で漁に参加したわけではない。ヴェズ男性が妻の親族を訪ねたときによくおこなうように、数日間滞在するついでに妻の兄弟たちと出漁したのである。F1-2jの婚約者の場合はこれと異なるが、1995年から1996年にかけての筆者の滞在中には、彼もF1の者と出漁することはまずなかった。また、彼が参加したのはまき網漁そのものではなく、まき網漁をおこなう間に魚がかかるよう置き刺網を設置しただけであり(表7の脚注を参照)、労働時間が短く漁獲も分配されていない。つまりF1は、住む村や複合世帯が異なる親族や姻族を頻繁に漁へ同行させていたが、長期間にわたる漁撈の主力として期待してはいなかったといえる。

次に、F1の女性の労働投入量が調査時期によって大きく異なり、雨季には乾季の7分の1にすぎないことが目立つ。雨季には男性が遠隔地出漁から帰ってくるため女性の出漁頻度が低下すると述べたが(4.3)、ここではそのような説明は当てはまらない。なぜなら、乾季にF1を調査したとき、夫たちはまだ遠隔地に出漁していなかったからである。F1女性の労働量に季節差がみられる直接の理由は明らかでないが<sup>18)</sup>、女性の漁に関しては、次のような一般的傾向を指摘することの方がむしろ重要であろう。それは、女性は漁撈以上に家事に多くの時間をさかなければならないため<sup>19)</sup>、男性ほど熱心に漁撈をおこなわず、きわめて些細な理由によって出漁したりしなかったりするということである。たとえば、漁に出ない女性に対してその理由を尋ねてみると、「乗り気がしない(*Tsy mahefa*)から」というあまり明確でない回答がしばしばある。このようなことは男性の場合ほとんどなく、具体的な用事や不調な体の部位が常に言及される。F1女性における出漁日数の季節差も、究極的に、女性があまり漁に熱心でないことから起こるのであろう。また、F2女性の出漁日数が全体的に少ないことや、一般的に女性の出漁日数が少ない(4.2)ことも、このような傾向から説

明できよう。

表を見ると、男性は女性に比べてはるかに多くの労働を漁撈にさいていることがわかる。また、男性では労働投入量が気まぐれに変化することもない。F2では男性の労働量が雨季にやや少なくなっているものの、乾季と比べて2割程度の誤差であり、相対的に大きい違いではない。アンパンラヴァ村では、親族や姻族が漁に参加したり女性が漁に出たりもするが、日常的な漁撈の主力は複合世帯内部の男性であるといえる。

## 6.2 複合世帯内部での労働分担

表9は、漁撈の主力と見なせる男性について、個人別の出漁状況を示したものである。まずF2について見てみると、雨季と乾季で出漁時間が大きく異なったのはF2-2Dのみである。F2-2Dの出漁時間が雨季に短かったのは、妻が病気になって5kmほど離れた村に里帰りしたため、その様子を時おり見に行っていたことによる。F2の男性には、表中の3人以外にF2-2Bがいる。彼は、胸を患っていたために年間を通じてほとんど出漁していなかった<sup>20)</sup>。調査期間中、漁撈に専念していたF2-2CとF2-3Dの2人の労働時間は、いずれも1日平均2時間程度であった。

いっぽうF1では、2つの調査時期において全体の労働投入量がほとんど同じであるにもかかわらず、主要な出漁者が時期によりまったく異なる。乾季に頻繁に出漁していたのはF1-2CとF1-3Aの2人で、その出漁時間はF2の男性らとほぼ等しく、

表9 各複合世帯の成人男性による出漁（14日間）

複合世帯	出漁者	乾季*		雨季	
		出漁回数	出漁時間	出漁回数	出漁時間
F1	F1-1A	0	0:00	5	10:48
	2C	8	33:22	2	4:55
	2E	2	8:52	8	16:49
	2I	0	0:00	5	14:46
	3A	8	32:46	9	28:59
	合計	18	75:00	29	76:17
F2	F2-2C	8	29:26	8	24:55
	2D	8	30:54	6	18:09
	3B	8	30:28	10	30:27
	合計	24	90:48	24	73:31

\* 乾季の調査期間は7日間だったので、すべての値を2倍して14日間分に統一した。

1日平均2時間ほどだった。ところが雨季には、同じ頻度で出漁していたのはF1-3Aのみである。F1-2Cは、「何者かに呪薬 *aoly* を盛られたため」<sup>21)</sup>体調を崩しており、ほとんど出漁していなかった。彼に代わって雨季に出漁していたのは、高齢のためふだんはほとんど出漁しないF1-1A、ふだんは浜辺でカヌー製作に従事することの多いF1-2E、乾季の調査時には頻繁にムルンベ市へ買い出しに行ったため出漁回数が少なかったF1-2Iの3人だった。ただし、彼ら3人が出漁したのは、F1-2Cの病気により労働力不足が生じたという理由のためだけではない。ミナミキビナゴの魚群が回遊し、ふだん出漁頻度が少ない者もまき網漁に駆り出されたため、F1-2Cの病気による労働量減少分を結果的に補ったと考えるべきである。

F1の男性にはこのほか、乾季にも雨季にも出漁しなかったF1-2Bがいる。彼は、ふだんは塩魚やタコの買い付けと加工をおこない、カヌー製作にも従事することが多いため、F1の中では出漁頻度が少ない。まき網漁のときには彼もこれらの仕事を中止して漁に参加することが多いのだが、雨季の調査時期には妻の村を訪問していたため漁に参加していなかった。

このように見てくると、ヴェズ漁民の生産単位として複合世帯が重要である理由がわかる。複合世帯として結びつく世帯の数がある程度多ければ、まき網漁の例からわかるように、多人数を要する漁法を容易におこなえる。また、病気や加齢によって漁におこなえなくなったときにも扶助を受けることができる。とくに漁撈の場合、出漁者の体力は著しく漁獲高に影響し、女性が男性と同じ程度の漁獲をあげるのは困難であるから、このような相互扶助はいっそう重要である。

成人男性全員が健康な場合にも、協同の利点は大きい。F1の例で見たように、余剰の労働力をカヌー生産や塩魚加工、買い出しなど他の活動にも向けることができるためである。このようなことは、F2でも同様にみられる。たとえばF2-3Bは、筆者の滞在中、タコの内臓の買い付けを試みた。アンパンラヴァ村の沖のヌサオ島にはタコが多いため、近隣の村人が泊まりがけで磯漁りをおこない、タコを干物にする過程で大量の内臓を廃棄する。F2-3Bは、これを安く買い取って、釣り漁師の多い別の村で釣り餌として売ろうとしたのである。この試みは長続きせず失敗に終わったが、季節的に毎年おこなわれる塩採集のような活動（飯田 2001）もある。

つまり、労働力の観点から見ると、漁民にとっての複合世帯の重要性は3点にまとめられる。第一に、多くの労働力を必要とする漁法が容易におこなえる点、第二に、出漁できなくなったメンバーが他のメンバーからの扶助を期待できる点、第三に、漁撈以外の活動にも余剰の労働力を配分することが可能になる点である。

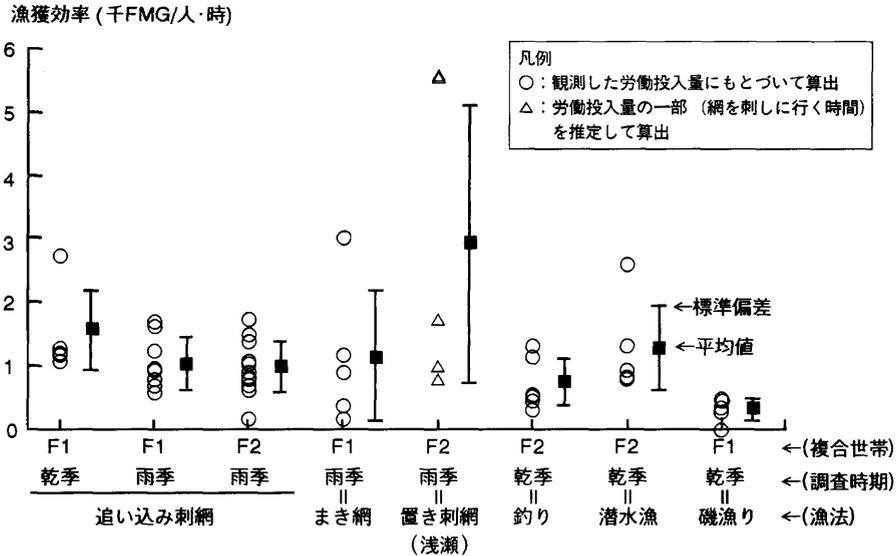


図10 漁法ごとの漁獲効率の比較

### 6.3 漁法ごとの漁獲効率の比較

図10は、調査期間中に2つの複合世帯が5日以上おこなっていた漁法に注目し、それぞれの漁獲効率を示したものである。漁法ごとの労働投入量をのべ労働時間であらわし、漁獲量は金額に換算した。同じ複合世帯に属する者が塩魚加工のために魚を買い上げた場合、買い上げ価格ではなく加工後に売却したときの価格で換算し、自家消費した魚は浜売りの価格で換算した。なお、漁獲効率を算出するにあたり、置き刺網漁の労働投入量の一部は推定によった。夜間における網の設置を筆者が観察できなかったためである。そこで、網の設置に要する時間を他の機会に測定し、ほぼ20分であると推定した。

この図から、沖合の置き刺網漁の漁獲効率が高いことがわかる。とくに、5回の漁のうち2回において漁獲効率の値が高く、平均値を引き上げている。このとき、ふだんあまり水揚げされないフウライボラ *antendro* (小さいものは *torovoke* という； *Crenimugil crenilabis*) の大群が来遊し、漁獲高が特別に多かった。14.3 kg の大漁だった日には、漁獲の8割 (11.5 kg) をフウライボラが占めたほどである。このように大漁をもたらすようなフウライボラの回遊は、1年に何回もあることではない。その機会に運よく遭遇しないかぎりには、置き刺網による漁獲効率も他の漁法とほとんど同じレベルと考えてよい。実際、アンパシラヴァ村民も、この漁法の漁獲効率がとくに

よいとは考えていない。

また、置き刺網漁による漁獲効率は、統計学的に見て測定値の分散が大きすぎるため、他の漁法と比べても漁獲効率の有意差は出ない。むしろ注目すべきは、女性による磯漁りである。磯漁りにおいては、次の漁法に比べて漁獲効率が有意に低かった。①追込刺網漁 (F1, 乾季) ( $t$ -test.  $t=3.86, p<0.05$ ), ②追込刺網漁 (F1, 雨季) ( $t=3.69, p<0.005$ ), ③追込刺網漁 (F2, 雨季) ( $t=3.37, p<0.01$ ), ④潜水漁 ( $t=2.82, p<0.05$ )<sup>22</sup>。また、Kruskal-Wallis の検定をおこなったところ、すべての漁法を対象としたときには漁法ごとに漁獲効率の差があると結論できた ( $\chi^2=16.15, df=7, p<0.05$ ) が、磯漁りに関するデータを除外した場合には漁獲効率の差はないと結論できた ( $\chi^2=8.95, df=6$ )。これらから、磯漁りは他の漁法と比べて漁獲効率が有意に低いと結論できる。

磯漁り以外の漁法ではほとんどの場合、(45回中40回) 1人1時間あたりの漁獲効率が 2,000FMG 未満である。つまり、男性が漁をおこなう場合には 1,000FMG/人・時間から 2,000FMG/人・時間が標準的な漁獲効率だといえよう。この金額は、もっとも安価な主食である乾燥トウモロコシに換算すると約 2 kg で、成人男性が 1～3 日で消費する量に相当する。また、やや高級な主食である米に換算すると約 1 kg で、成人男性が 1～2 日で消費する量である。

#### 6.4 換金専門型の漁法と融通型の漁法

図11は、漁獲全体のうち売却されたものの割合を漁法別に示したものである。いずれの漁法でも売却した漁獲の割合は日によって変動しているが、とくに目立つのは、磯漁りと潜水漁による漁獲が比較的多く売却されていることである。これは漁獲対象の偏りに由来する。表10を見ると、磯漁りや潜水漁においては魚以外の海産物が多く水揚げされている。前章で述べたとおり、魚類以外の海産物は、タコの市価が低い場合などを除き、ほとんど自家消費されることがない。つまり、磯漁りや潜水漁は、魚類以外の高価な海産物を対象としているのである。

次に、魚類の水揚げが多い他の漁法についてみると、漁獲のすべてを自家消費したというケースは追い込み刺網漁24例のうち15例、置き刺網漁5例のうち3例、釣り6例のうち4例で、いずれも過半数を占める。これらの漁法は主に自家消費用の魚を捕るためにおこなうのであり、浜に買い手が来た場合や消費分を超える余剰の漁獲があるときだけ魚が売却される。乾季の追い込み刺網漁で売却率が高いのは、農閑期を利用して近隣の農村から魚の買い付けにアンバシラヴァ村までやってくる人が多かった

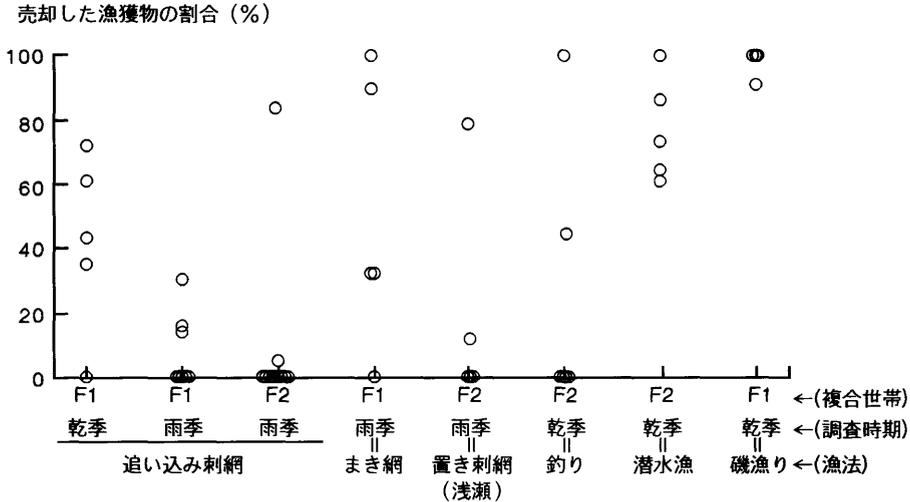


図11 漁法ごとの漁獲物売却率の比較

ためである。

ただし、まき網漁については、買い付けの少ない雨季であったにもかかわらず、売却した漁獲の割合が高かった。まき網漁で漁獲の大部分を占めるミナミキビナゴ (表10) はサイズが小さく、ヴェズの人々に好まれないが、前章で述べたように仲買人が買い求めるため積極的に漁獲される。この魚は高価ではないが、大きな魚群は大勢で長時間漁をしても捕り尽くせないほどなので、まき網によるミナミキビナゴ漁は「(多額の)現金をもたらす (*mampisy drala*)」といわれる。なお、この調査期間中はミナミキビナゴしか捕れなかったが、カマスやメアジの類もまき網で多く捕獲される。これらの魚類も、ミナミキビナゴ同様に大群をなすので、もっぱら換金目的で捕獲される。

以上のように、消費と流通の視点から漁撈活動を見た場合、2つのタイプの漁法がある。第一は、魚類以外の高価な海産物や、大群をなす魚種を一網打尽に捕獲する漁法である。これらの漁法では漁獲の大半が換金されるので、これを換金専門型の漁法と呼ぶことにする。第二のタイプは、多様な魚類を比較的まんべんなく捕獲するというものである。その漁獲は、高い値をつける買い手がいるときや余剰があるときにだけ販売され、そうでなければ自家消費される。家計に果たす役割が多義的であるといってもよい。このような漁法を融通型の漁法と呼ぶことにする。

アンバシラヴェ村でもっとも頻繁におこなわれるのは融通型の追い込み刺網漁で (前出表2)、漁獲を売却にも自家消費にも回せるような漁法として好まれている。

表10 各漁法により漁獲された水族

学名	方名	和名	追込刺網		まき網		置刺網		釣り		潜水漁		網漁		漁法 — 複合世界 — 時期 — 事例数	
			F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2		
			乾季	雨季	乾季	雨季	乾季	雨季	乾季	雨季	乾季	雨季	乾季	雨季		
Family Clupeidae(ニシン目ニシン科)																
<i>Spratelloides delicatulus</i>	varilava	ミナミキビナゴ			●●●											
Family Elopidae(カライワシ目カライワシ科)																
<i>Elops machanata</i>	kiosa	[カライワシ属]							+							
Family Holocentridae(キンメダイ目イトウダイ科)																
<i>Myripristis</i> sp.	fiamena	[アカマツカサ属]	+							+				+		
Family Mugilidae(スズキ目ボラ垂目ボラ科)																
<i>Crenimugil crenilabis</i>	antandro	フウライボラ				+				●						
Family Sphyrnaidae(スズキ目ボラ垂目カマス科)																
<i>Sphyrna</i> sp.	mandriandovo	[カマス属]														
Family Serranidae(スズキ目スズキ垂目ハタ科)																
<i>Epinephelus</i> spp.	lovo	[ハタ属]														
<i>Epinephelus</i> sp.	tsarako	[ハタ属]														
Family Carangidae(スズキ目スズキ垂目アジ科)																
<i>Scomberoides</i> sp.	kiiririke	[イケカツオ属]														
<i>Trachinotus</i> sp.	talantala	[コバンアジ属]														
<i>Carangoides</i> sp.	lanora	[ヨロイアジ属]														
Family Gerreidae(スズキ目スズキ垂目クロサギ科)																
<i>Gerres acinaces</i>	ambariaka	ツツハリサギ	+		●	●		+		+						
Family Sciaenidae(スズキ目スズキ垂目ニベ科)																
<i>Polynemus</i> sp.	bobokoro	[ツバメコシロ属]														
Family Mullidae(スズキ目スズキ垂目ヒメジ科)																
<i>Upeneus</i> spp.	Isoy	[ヒメジ属]														
<i>Parupeneus</i> spp.	fiantsomoke	[ウミヒゴイ属]														
Family Monacanthidae(スズキ目スズキ垂目ヒメツバメウオ科)																
<i>Monacanthus argenteus</i>	angny	ヒメツバメウオ														
Family Lutjanidae(スズキ目スズキ垂目エダイ科)																
<i>Lutjanus fulviflamma</i>	amporama	ニセクロホシフエダイ														
<i>Lutjanus</i> sp.	sorotale	[フエダイ属]														
Family Hamulidae(スズキ目スズキ垂目イサキ科)																
<i>Plectorhynchus flavomaculatus</i>	fiandraty	オンシャレコショウダイ														
<i>Plectorhynchus gaterinus</i>	angarera	[コショウダイ属]														
Family Teraponidae(スズキ目スズキ垂目シマイサキ科)																
<i>Terapon jarbua</i>	jihy	コトヒキ														
Family Nemipteridae(スズキ目スズキ垂目イトヨリダイ科)																
<i>Scolopsis lineatus</i>	tsabeabato	ヨコシマタマガシラ														
Family Sparidae(スズキ目スズキ垂目タイ科)																
<i>Acanthopagrus berda</i>	ehoto	ナンノウチヌ														
Family Lethrinidae(スズキ目スズキ垂目エフキダイ科)																
<i>Lethrinus harak</i>	tapaporoha	マトエフキ														
<i>Lethrinus lentjan</i>	angelike	シモフリエフキ														
<i>Lethrinus nebulosus</i>	ambitsy	ハマフエフキ														
<i>Lethrinus atkinsoni</i>	tsabeake	イソフエフキ														
<i>Lethrinus</i> sp.	antsisy	[フエフキ属]														
Family Chaetodontidae(スズキ目スズキ垂目チョウチョウウオ科)																
<i>Chaetodon</i> spp.	fianakoho	[チョウチョウウオ属]														
Family Pomacanthidae(スズキ目スズキ垂目キンチャクダイ科)																
<i>Pomacanthus semicirculatus</i>	latidaka	サザナミヤッコ														
Family Pomacentridae(スズキ目スズキ垂目スズメダイ科)																
<i>Abudefduf</i> sp.	tsaborokodo / mangalakaola	[オヤビッチャ属]														
Family Labridae(スズキ目スズキ垂目ベラ科)																
<i>Halicoreus</i> spp.	leme	[キューセン属]														
<i>Cheilodactylus</i> sp.	antsoraby	カマスベラ														
Family Scaridae(スズキ目スズキ垂目フダイ科)																
<i>Scarus</i> spp.	tabake	フダイ類														
Family Acanthuridae(スズキ目ニザダイ垂目ニザダイ科)																
<i>Naso unicornis</i>	fiantsifa	テングハギ														
<i>Acanthurus triostegus</i>	andralame / dabandriake	シマハギ														
<i>Acanthurus dussumieri</i>	menasoly	[クロハギ属]														
<i>Acanthurus</i> spp.	angy	[クロハギ属]														
Family Siganidae(スズキ目ニザダイ垂目アイゴ科)																
<i>Siganus sutor</i>	amboramasake	チリメンアイゴ														
Family Platycephalidae(カサゴ目コチ科)																
<i>Papillolepis longiceps</i>	toho	(属和名・種和名不明)														
Family Balistidae(フグ目モンガラカワハキ科)																
<i>Rhinecanthus aculeatus</i>	tsontso	ムラサメモンガラ														
Family Tetradontidae(フグ目フグ科)																
<i>Arothron</i> sp.	botaria	[モヨウフグ属]														
未定種	angea															
未定種	besisike															
Phylum Echinodermata(棘皮動物門)																
<i>Holothuria nobilis</i>	benono	イシナマコ														
<i>Actinopyga mauritiana</i>	rorohankena	クリイロナマコ														
未定種	zangambato															
未定種	folitsesake															
未定種	somalipapa															
未定種	nitse															
未定種	stylo															
Phylum Mollusca(軟体動物門)																
未定種	angisy	[イカ]														
<i>Octopus</i> sp.	horita	[マダコ属]														
<i>Pleuroploca trapezium</i>	bozike	イトマキボラ														
<i>Chicoreus ramosus</i>	dronka	テングガイ														
Phylum Crustacea(甲殻動物門)																
<i>Panulirus</i> spp.	tsitsike	[イセエビ属]														

●●●: 重量比 75%以上の水族 ●●: 50%~75% ●: 25%~50% \* : 10%~25% + : 10%未満

これに対し、換金専門型の漁法がおこなわれる理由は多岐にわたり、まき網漁のように多額の現金収入を期待しておこなわれる漁法もあれば、潜水漁のように消極的理由でおこなわれる漁法もある。乾季の調査期間中に漁網を所有していなかった F2 では、追い込み刺網漁ができないのでおこなうことができない (mijaly laoke) と嘆いており、いわば仕方なく潜水漁をおこなっていた。ただし若い男性の中には潜水漁を好む者もあり、網漁に出た他の世帯から魚をもらえそうなきには積極的に潜水漁をおこなう。

換金専門型の漁が積極的におこなわれる場合、自家消費用の魚がすでに確保されている点に注意したい。まき網漁においてさえ、主要漁獲物であるミナミキピナゴは副食として好まれていないため、まき網漁の最中に他の魚がかかるよう浅瀬に別の刺網を張ることがある (付表参照, F1 による 2月3日の漁など)。アンパシラヴァ村の漁撈においては、現金獲得という動機も無視できないものの、副食獲得という動機がより強くあらわれているといえる。

## 6.5 漁獲高

表11は、2つの複合世帯における調査期間中の漁獲高を示したものである。このうち女性の漁獲量は、調査時期や複合世帯によりまちまちである。これに対し男性は、調査時期による労働投入量の差があまりなく (表8)、漁法による漁獲効率も差がない (図10) ことから推測できるように、いずれの調査時期にも漁獲高がほぼ同程度で

表11 調査期間中の漁獲量と主食購入費の比較 (14日間, 単位: FMG)

	F1		F2	
	乾季*	雨季	乾季*	雨季
漁獲量 (男性)	126,140	101,536	91,580	97,635
うち, 自家消費分	67,700	51,120	36,500	76,785
うち, 売却分	58,440	50,416	55,080	20,850
漁獲量 (女性)	9,020	450	1,100	2,550
うち, 自家消費分	300	0	300	750
うち, 売却分	8,720	450	800	1,800
主食購入費 (推定)	231,300	169,310	187,060	147,200
最低限主食購入費**	108,889	108,889	126,583	126,583

\* 乾季の調査期間は7日間だったので、すべての値を2倍して14日間分に統一した。  
 \*\* 構成員全員が必要な熱量をすべてトウモロコシ (もっとも安価な主食, 700FMG/kg, 3,600Cal/kg) でまかなったと考えたときの主食購入費。成年男子は2,500Cal/日, 成年女子はその80%, 6歳から14歳までの子供は70%, 6歳未満の子供は40%を消費すると計算した。

ある。ここでは2つの点に注意したい。第一は、全漁獲に対する自家消費分の割合が4割（F2 乾季）から8割（F2 雨季）までの範囲を変化し、一定とはいえないことである。このことは、漁撈が副食自給と現金獲得の2つの役割を担っており、両者の比重の置き方が状況に応じて変わりうることを示す。

第二は、それぞれの複合世帯が主食購入にあてた金額が漁獲高に比べて明らかに多いことである。表では、下の2段に2種類の主食購入費を示した。第一は実質的な主食購入費で、複合世帯を構成する世帯がこの間に何をどれだけ調理したかを聞き込んだ結果から計算したものである。第二は最低限必要な主食購入費というべきもので、もっとも安価な主食であるトウモロコシから必要な熱量をすべて摂取したと仮定して計算したものである<sup>23)</sup>。この2つのいずれと比べてみても、それぞれの複合世帯が得た漁獲量は少ない。しかも、実際に換金したのは漁獲の一部であるから、この期間だけについてみれば、家計の赤字が大きいことは明らかである。

このような家計収入の不足は、漁撈以外の活動によって補填されているとは考えにくい（飯田 2001）。調査期間外に、日頃の不足を埋め合わせるほどの大漁があったのである。調べてみたところ、そのような大漁は、水産資源の豊富な遠隔地へ出漁した際にみられた。詳細は別稿で論ずるが、遠隔地でおこなわれたF1によるサメ刺網漁とF2によるナマコ潜水漁においては、わずか6週間の漁獲が複合世帯全員の食費1年分に匹敵していた。したがって、アンパシラヴァ村周辺でおこなわれる漁撈は、現金獲得の点ではあまり重要でないといえる。

## 7 考察——アンパシラヴァ村における漁撈活動と家計経済の特質

### 7.1 漁場環境と漁撈活動

アンパシラヴァ村でおこなわれていた漁撈活動の特徴としてまず目につくのは、サンゴ礁内部でおこなう漁法が多いことである。漁場の特徴は、漁撈に関する他のいくつかの特徴とも密接に関わり合っている。

第一に、サンゴ礁の内部は潮汐の影響が強く潮汐差を利用した漁法が盛んなため、ほとんどの漁撈活動は潮汐のリズムに従っておこなわれる。第二に、サンゴ礁の内部は生物相が多様であるため、そこでは多様な種類の魚を少しずつ捕獲する漁法が多くなる（西島 1988）。まき網漁は特定の魚類を大量に捕獲する数少ない漁法のひとつで

あるが、魚群の発見が必要であるため、頻繁におこなわれる漁法ではない。特定の水族のみを対象とする漁法のうち比較的頻繁におこなわれるのは、潜水漁と磯漁りのみである。第三に、漁獲のほとんどはサンゴ礁に定着する水族であるため、漁法の季節性が少なく漁獲効率も年間を通じて大きな変化がない。この点は、季節的に回遊するニシンやサケなど、大魚群を対象とする寒帯・温帯域の漁撈活動と大きく異なる（テスタール 1995）。

第四の特徴も、サンゴ礁という漁場条件により規定されている。それは、漁具が小型であり大規模な資本や労働力を必要としないことである。サンゴ礁水域は純生物生産が高い環境であるため（諸喜田 1988）、漁船や漁具が小型でも多様な魚種を対象にすればある程度の漁獲をあげることができる。しかも、サンゴ礁内部は浅いうえに障害物となる礁が多いため、大きな漁船や漁網ではかえって操業しにくい。アンパシラヴァ村で漁撈用に用いられる小型カヌーの値段は数万 FMG である。漁具も比較的安価で、長さ 100 m の刺網は 10 万 FMG 程度である。これらの生産手段は、漁獲効率がせいぜい 1,000~2,000 FMG/人・時間にすぎなくとも、毎日漁をするための投資としては決して高くない。このため、先進諸国や東南アジア地域によくあるように、金融機関や仲買人に資金を前借りして漁船や漁具を購入することは一切おこなわれていない。また、小型の漁船や漁具を用いる結果、操業に必要な人数は少ない。まき網漁は例外的に大人数でおこなわれるが、それでも 10 人程度であり、しかも一時的な協業である。大規模な漁撈集団や網元—網子関係など、他地域の漁村にみられるような漁撈組織は発達していない。

アンパシラヴァ村の漁撈活動がサンゴ礁という漁場環境に強く特徴付けられていること<sup>24)</sup>は、漁民たち自身の意識にのぼることはほとんどないようである。ただ、魚種の豊富さに関してはマングローブ林や淡水域 *rano mamy* と比較され、「この辺りの海は魚の種類が多い (*Maro karazam-pia an-drano mba atoy*)」と言われることがある。

## 7.2 生産単位としての複合世帯

網元—網子のような雇用関係や大規模な漁撈集団がみられないアンパシラヴァ村では、複合世帯の内部から漁のパートナーが選択されることが多かった。外部者の立場から見ると、複合世帯はまず漁獲分配の範囲として具体化できるが、アンパシラヴァ村民にとっては生産の単位としても大きな意味をもつのだといえる。さらに、本文ではふれなかったが、複合世帯はしばしば共食の単位でもある。F1 では男たちが妻の

調理した食事を持ち寄って食事をする習慣があり、幼い子供を持つ者を除き女たちも共食していた。F2 では世帯ごとに食事がおこなわれていたが、1a の世帯に対して他の世帯が食事を差し入れることがしばしばあった。このようにみえてくると、複合世帯は、漁獲物だけでなく労働力や食事などさまざまな「もの」が頻りに交換される社会的範囲といえる。

いっぽう、「複合世帯」という語彙を持たないヴェズの人々は、同じ複合世帯の構成員を「親族 (*longo, foko*)」<sup>25)</sup>、「親子 (*mpianake*)」などと表現する。これは、すでに述べたように、拡大家族と呼べる人々が複合世帯を構成することに対応する。また、同じ複合世帯の構成員を「敷地を共有する私たち (*zahay miharo lakoro*)」などと表現することもある。家屋密度の高い敷地は木戸のついた柵で囲まれて他の複合世帯と明確に区別されているため、初めて村を訪れた者にもこの表現は理解しやすい。このようにヴェズ自身は、親族関係や居住空間の観点から複合世帯を捉えている。あるいは、居住空間を共有する親族を複合世帯の構成員と見なしているといってもよい。

このことは、複合世帯の内部で「もの」が頻りに交換されることと関連している。ヴェズの人々はしばしば「親族は助け合うべきである (*Sabo'e mifanampy ty longo*)」と言い、親族どうしによる相互扶助を美德と見なしているが、この規範の実行は容易ではない。親族 *longo* という語の指示範囲が曖昧で、期待される扶助 (*fanampea*) はしばしば多大な負担となるからである<sup>26)</sup>。このため現実には、相手に応じて扶助の度合を加減せざるを得ない。このようななか、系譜的關係が直接的で居住空間も重複している複合世帯は、扶助が優先される集団となっているのである。このことは、親族関係や居住地の距離が近いと相互関係は一般的互酬性にもとづくという指摘 (Sahlins 1972: 196–198) に沿うものである<sup>27)</sup>。

このように、複合世帯はさまざまな点で重要な社会単位だといえるが、これまでのヴェズ研究ではその存在が指摘されてこなかった。家計の分析に限ってみると、これまでの研究では核家族が単位として扱われ (Battistini 1964; Koechlin 1975)、より大きな範囲が経済的に重要であることは顧慮されていない。ただ、その原因が調査不足にあるとは断定できない。複合世帯内部の結びつきは条件によって異なるからである。たとえば、農耕により強く依存するヴェズのあいだでは世帯を越える労働力や生産物のやりとりが頻繁でなく、居住空間を共有する親族に対して異なった態度をとるといふ印象を筆者は持っている。これに対しアンパツラヴァ村では、まき網漁のように比較的多くの労働力を動員する漁撈が普及した結果、協業に参加する各世帯が強く結びつく必要性がきわめて高い。ヴェズ社会を論じるうえでは、調査地の条件の違いに応

じて複合世帯の機能を見ていくことが必要であろう。

### 7.3 現金獲得と副食獲得

漁獲物の多くが販売されているという現状においては、漁撈活動は市場を介して村の外からも影響を受けている。アンパンラヴァ村では、換金専門型の漁法と融通型の漁法を使い分けつつ市場経済に対応していた。換金専門型の漁法で捕れる海産物、とくにナマコやミナミキピナゴなどはアンパンラヴァ村民の好みに合わないため、村外からの需要がなければこれらの漁法はほとんど用いられないだろう。まき網漁には特殊な漁網が必要であるが、潜水漁は簡単な漁具でおこなえるので、アンパンラヴァ村民にとって身近な現金獲得手段となっている。

しかし、ヴェズの漁撈は現金獲得手段としてだけ位置づけられているわけではない。このことは、零細漁民 (peasant fishermen) と位置づけられた1940年頃のマレー漁民と比較すればよくわかる。マレー漁民たちは漁撈だけでなく稲作やココヤシ栽培、賃金労働などを複合しておこなっていたにもかかわらず、彼らが自家消費する魚の価格は浜で売却する魚の1割に満たなかったと見積もられている (Firth 1966: 260)。いっぽうアンパンラヴァ村のヴェズ漁民たちは、漁撈以外の現金獲得の機会が限られているにもかかわらず、しばしば漁獲の半分以上を副食として消費し、時期によっては自家消費率が8割近くに達した。これは、遠隔地における季節的な漁撈が多額の現金収入をもたらすため、遠隔地での漁獲をも含めれば自家消費率は大きく下がる。しかし、村の周辺 (地先) でおこなわれる漁撈に関するかぎり、主要な目的が現金獲得でないことは明らかである。

村の地先の日常的な漁撈において現金獲得の最大化がほとんど顧慮されていないことは、次の点からもわかる。まず、漁獲を売却するのは換金専門型の漁をおこなった場合か浜によい買い手が来た場合、自家消費しきれないほど多くの漁獲があった場合などに限られており、自家消費する漁獲と売却する漁獲の割合は時と場合によってさまざまであった。また、利潤の高い塩魚加工がそれほど盛んでないことも、現金を獲得しようとする動機が薄弱であることを示す。自家消費分を上回る余剰の漁獲があったときには、他人に売るより自分たちで塩魚に加工した方が大きな利益を得られるはずだが、実際に自分で塩魚を加工する者はほとんどいない。

漁撈活動において副食獲得が重視されていることは、彼らの発話にもあらわれる。たとえば、浜に帰り着いた漁師から魚を買おうと仲買人が手を伸ばそうとすると、「それは私たちのおかずだよ (laok'ay io!)」と漁師にたしなめられることがある。風が

強いために出漁できない日が続くと、漁師たちは「おかずが足りない」、「魚を食べたい (*borò fia*)」と言って嘆く。このような場面で「生活費が足りない」という言い方がなされることは決してない。また、自家消費のための魚をまったく捕ることなく換金専門型の漁が何日も続くこともめったにない。たいていは、漁の合間に副食捕り用の刺網を張ったり、他の世帯から魚を分けてもらったりする。

浜辺で談笑している漁師が会話を切り上げて漁に出ようとするときに、「ちょっとおかずを探しに行ってくるよ (*Hila laoke tse*)」と言って去っていくこともある。この言い回しは、「ちょっと水浴びに行ってくるよ (*Handeha handro tse*)」あるいは「ちょっと水遊びに行ってくるよ (*Hisa an-drano tse*)」、「ちょっとピーナツを買うための金を稼いでくるよ (*Hangalake drala kapiky tse*)」などと言い換えられることもある。いずれの場合も大きな漁獲をあげようと気負うのではなく、漁の時間になったから海へ行き、少しでも魚が捕ればよいのだといった姿勢が感じ取れる。頻繁に漁をおこなう成人男性の平均出漁時間が1日2時間程度であることから、村の地先の漁撈では多額の現金収入がほとんど期待されていないといえる。

#### 7.4 現金経済下の食料自給

副食獲得を相対的に重視するアンパシラヴァ村地先の漁撈活動は、一見すると食料安全保障 (food security) の一環であるようにみえる。つまり、マダガスカル国内で頻発する食料価格の高騰というリスクに対処するため、漁民たちは食料を現金購入せず自家生産しているかのようである。現金経済への参与が新たな経済的リスクの負担を意味することは、同じく物価上昇の著しかった旧ザイール国の例をみればわかる。同国では、現金を介した交換のほかに物々交換がおこなわれており、物価高騰の影響を緩和していたという (Ichikawa 1991)。

しかしアンパシラヴァ村の事例を少し検討してみると、現金を介さず魚を確保することが食料安全保障につながっていないことは明らかである。筆者の調査によると、アンパシラヴァ村の食事では米やトウモロコンなどの主食作物が決して欠かされないのに対し、魚や豆類などの副食を食べる割合は69%にすぎず、魚だけに限れば48%とさらに低くなる (飯田 2001)<sup>28</sup>。また、魚類をはじめとする海産物は一般に重量あたりの熱量が低いため、たとえ毎回のよう食べたとしても、生活に必要な熱量をこれらの食品だけから摂取することは不可能である (Yesner 1980)。村民たちも、副食類は腹を満たさない (*tsy mahavintsy*) と考えており、毎日魚だけを食べて暮らすという考え方を一笑に付すにちがいない。食事観の点でも栄養の点でも、より重要なのは

主食作物であり、これらの作物をほとんど自家生産しない漁民たちの家計が食料安全保障を志向しているとはいい難い（飯田 2001）<sup>29)</sup>。

副食としての魚はむしろ、生存維持に必要な最低限の食料ないし生活費（subsistence minimum; Scott 1976）が確保されたのち、オプションに獲得され消費され则认为の方がよい。すなわちアンパシラヴァ村民は、遠隔地でのナマコ漁やサメ刺網漁によって大部分の生活費を稼いでしまい、村の地先ではとくに必要に迫られることなく漁に出ているのである。このため、大きな漁獲をあげようという気負いはほとんどみられない。得られた漁獲は食料としても現金収入源としても不可欠ではないので、自家消費するか現金化するかは場当たりに決められ、近隣農村よりもはるかに多くの魚が自家消費されている（注28参照）。この意味で、アンパシラヴァ村では魚を必需物資として消費するのではなく、奢侈物資として消費するのだといってよい<sup>30)</sup>。

アンパシラヴァ村の副食獲得は現金経済を回避してなされるのではなく、逆に、遠隔地漁による安定した現金収入を前提として成り立っている。この点で、生存維持のための自給的生産とは異なっている。しかし一方では、前節で示したように、現金獲得を目的とした生産活動とも異なる。生存維持活動/現金獲得活動という、生産物の経済的意義による生業分類でヴェズの漁撈を説明するのは難しいといえる。このような二分法に当てはめにくい生業は、近年、マイナー・サブシステンスという観点から論じられるようになってきた（松井 1998; 菅 1998）。しかし、アンパシラヴァ村地先の漁撈活動を単純にマイナー・サブシステンスと呼ぶわけにはいかない。以下に述べるように、ヴェズ漁民のアイデンティティを基礎づける点で、地先漁撈はヴェズにとってむしろメジャーな生業だからである（cf. 松井 1998: 250）。

調査中、何人かの成人男性に「どのような理由で毎日のように出漁するのか（*Ino ty anto'e andehaña'areo an-drano isanandro isanandro?*）」と尋ねてみたことがあった。遠隔地で大儲けをしてきたのにまだ働く必要があるのか、という意図で発した質問である。もし魚消費の欲求を満たすためだけなら、効率のよい遠隔地漁のみをおこなって魚を現金購入すればよく、村で出漁する必要はない。しかし実際には、多くの成人男性が村でも頻繁に出漁しており、彼らの属する複合世帯では魚を購入することがほとんどなかった。この理由に関する彼ら自身の答えは、「これが私たちの仕事だから（*Satsia ity ro asa'ay*）」、「海が私たちの畑だから（*Satsia hatsa'ay ty rano ô*）」、「海が私たちのオフィスだから（*Satsia biraô'ay ty rano ô*）」などというものであった。これらの語りは、明らかに、「ヴェズとは、海で生活するために必要な振る舞い（漁撈など）を身につけている人のことである」という、冒頭で示したヴェズの自己

表象の繰り返しである。地先の海にはナマコやフカヒレが少なく、したがって地先漁撈は大きな経済的利益をもたらすものではないが、そのような事情とは関わりなく、海と漁撈はヴェズたる「私たち」をかたどるものなのである。

彼らの言う「漁撈」が遠隔地漁と地先漁の両方を含むことを前提とすれば、地先漁は遠隔地漁におとらずアイデンティティを基礎づける、というべきかもしれない。しかし遠隔地漁はそもそも、地先漁の実践を積み重ねる中で経済的意義を見いだされ、地先漁で培われた技術が応用されることによって始まった。このような経緯をふまえば、ヴェズ漁民の生活にとって、大きな収入を得ることのみが漁撈の意義だったわけではない。海を深く知ることにより、新たな生活を切り開く手段をはぐくむことも、漁撈活動の重要な意義であった。したがって、ヴェズたる「私たち」をかたどるという点において、地先漁が遠隔地漁におとると見なす必要はまったくない。遠隔地漁の経済的意義が増し地先漁の経済的意義が低下したとしても、後者は依然としてアイデンティティ維持の実践として継続し、さらなる変化に対処するための技術をはぐくむ母胎となる。この点にこそ、漁獲高には還元しえない地先漁の意義があるのである。

## 謝 辞

本研究は、平成6～8年度および平成11～12年度に日本学術振興会特別研究員として筆者が受けた科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を資金として遂行された。調査の計画段階から取りまとめに至るまで、市川光雄教授（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）にはきめ細かに御指導いただいた。現地調査においては、Albert Randrianjafy氏（Parc Botanique et Zoologique de Tsimbazaza）、Gilbert Rakotoarisoa氏（同）、Man-Wai Rabevenanana氏（Institut Halieutique et des Sciences Marines）、Daniel Rakotomalala氏にさまざまな形で御支援をいただいた。現地調査から論文作成にかけての段階では、小山直樹教授（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）、深澤秀夫助教授（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、森山工助教授（東京大学大学院総合文化研究科）に多数の御指導をいただき、論文作成時には秋道智彌教授（国立民族学博物館）、吉田憲司教授（同）、金坂清則教授（京都大学大学院人間・環境学研究科）から、また魚名同定の参考文献に関しては中坊徹次教授（京都大学総合博物館）から有益な御助言をいただいた。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻の教官および院生諸氏は、ゼミナールその他の場で貴重なコメントをくださった。

以上の皆様と、筆者を快く受け容れてくださったアンパンラヴァ村の皆様に対し、心より感謝いたします。

## 注

- 1) ヴェズの漁法についてはいくつか報告があるが (Ottino 1963; Koechlin 1975), 漁法の種類を紹介する程度であり, それぞれの漁法がいかなる手順でおこなわれ漁民自身によってどのように使い分けられているかといった点は明らかでない。ヴェズ漁民の家計については, 本研究の調査地より南方における地域からの詳細な報告があるが (Battistini 1964), 農民の家計との量的な比較を目的としたものであり, 広く漁民社会の文脈の中で論じられているわけではない。
- 2) 多様な側面から人と自然の関わりを把握することの重要性は, 環境問題に関する近年のさまざまな議論の中で指摘されている。ポリティカル・エコロジー (Watts 1983; 島田 1999) の方向性をめぐる議論もそのひとつであろう。この分野では従来, ポリティカル・エコノミー論の視点を援用しつつ, グローバルな資本主義システムに内在する広義の権力関係こそが第三世界の環境を劣化させた最大の原因だと論じられてきた (Bryant and Bailey 1997)。この視点は, ポスト構造主義者 (Escobar 1999) と生態人類学者 (Kottak 1999) 双方の関心と呼んでいるものの, 政治的分析に重きを置くあまり環境そのものの把握を怠ってきたという批判も出されている (Vayda and Walters 1999)。現場で生起する問題を政策的側面のみから捉えるのではなく, さまざまな因子を考慮しつつ問題発見的に研究を進める態度が必要だといえる。
- 3) ただし, 食事と家屋を共有する「世帯」が3世代にわたる場合もある。結婚して出産した女性は, 配偶者と離婚したり死別したりすると, 子供と一緒に親もとに帰って暮らすことがあるからである。また, 娘が結婚しないまま出産した場合も同様である。
- 4) この図では, ほとんどの世帯が夫婦と未婚の子孫によって構成されているが, F1の成員2Bを中心とする世帯は例外である。2Bの弟にあたる2Lや甥にあたる3Iは, 本来ならば直系の父祖1Aと同じ世帯に属するはずであるが, 2Bには子がいないため, 2Lや3Iを養取した。子の養取にあたっては, 第一子が生まれた場合と同様, 子の実母の祖先に対して供儀 *soro anake* がおこなわれたという。*soro anake* に関しては, Koechlin (1975: 133) および Astuti (1995a: 92) を参照。
- 5) ただし, 妻方居住の例は決してめずらしくないし, 夫婦いずれにも縁のない新しい土地で生活が営まれることもある。したがって, 複合世帯内部の各世帯は父系的な血縁で結びつく傾向があるものの, 決して厳密ではない。
- 6) ただし, カマスなどは袖網をおそれずに向かってくるので, 網の目がカマスの魚体より小さくなければならないという。
- 7) アンパンラヴァ村ではみられないが, 日中にサンゴ礁外縁 *riva* の外側まで出かけて釣りをおこなう地域もある (Astuti 1995a: 27)。フランス料理の食材として適したサワラなどを捕るためである。
- 8) ウミガメの捕獲とそれを食べる際の儀礼的慣行については, Battistini (1964: 119) がふれている。
- 9) 正確には, 調査期間中の小潮は11月16日, 大潮は23日であった。漁撈活動に対する潮汐の影響を示すにはこの2つの日を比較するのがもっともよいのだが, 出漁者が多い日の方が傾向を知るには適当と判断し, 1日の潮汐差が小さい日の代表として14日を, 1日の潮汐差が大きい日の代表として22日を選んだ。
- 10) 原義は「友人」だが, 「～をするための」という限定がつくと同行者や協力者の意味にもなる。
- 11) この中には, 村に在住する成人だけでなく, 他村からの訪問者や幼少年が漁撈活動に加わった事例も含まれる。また, 磯漁りなど, カヌーを用いなかった漁撈活動の事例は含まれていない。このような場合には協同した集団の範囲が明確でないためである。
- 12) キョウダイの関係は一般に *mpizoky* と呼ばれることが多いが, ここでは男の兄弟である

ことを強調するために *mpirahalahy* とした。表3および表4の *mpirahalahy* とは別の関係である。男は、同性である兄弟を *rahalahy*、異性である姉妹を *anabavy* と呼び、女は、異性である兄弟を *anadahy*、同性である姉妹を *rahavavy* と呼ぶ。これらの語に接頭辞 *mpi-* をつけると、兄弟 *mpirahalahy*、姉妹 *mpirahavavy*、異性キョウダイ *mpianadahy* という関係を示す語になる。年上のキョウダイ *zoky* と年下のキョウダイ *zay* は、性別に関わらず用いられる。また、同世代の姻族については、同性の場合 *velahy*、異性の場合 *rañao* と呼び合う。

- 13) ただし潜水漁の場合には、4人という少人数のときにも、2つの複合世帯が協力している。これは漁法の性格を反映している可能性が高いが、事例数が少ないので断定できない。
- 14) 実の子も甥も姪も、ヴェズの親族範疇では同じ「子 *anake*」に分類される。漁師の「子」らは、甥と姪を含め、同じ「複合世帯」に属することが多い(本文2.2参照)。漁師と異なる複合世帯の子らが魚を持ち去る場面には、筆者は会ったことがない。
- 15) 1996年の調査時には、1FMG(マダガスカル・フラン)はおおよそ0.03円程度に相当した。同年におけるマダガスカルの1人あたり国民総生産(GNP)は約100万FMG(250ドル)(Tudor 1998)、ムルンベ近辺における学校教師の月給は15万FMG程度であった。なお、マダガスカル村落部では、しばしば5FMGをアリアリ *ariary* と呼んで通貨を勘定しているが、ヴェズの人々もこれをジャラ *drala* と呼び頻用する。
- 16) アンパンシラヴァ村近辺では、フグ毒は知られていない。
- 17)  $3,000 \div (800/0.6) - 1 = 1.25$ ;  $1,500 \div (500/0.6) - 1 = 0.8$
- 18) F1女性自身の説明によると、雨季にあまり漁に出なかったのは、タコの価格が安く通常の半値にすぎなかったためだという(本文5.3参照)。もしそうだとすれば、F1女性は現金獲得を主目的に磯漁りをおこなうのに対し、F2女性は副食獲得をも目的としていたため、タコ価格の下落した雨季に異なる対処をしたということになる。確かに、乾季の調査期には、F1女性が4,510FMG相当の漁獲高のうち4,360FMG(96.7%)を売却したのに対し、F2女性は漁獲高550FMGのうち400FMG(72.7%)を売却しており、売却した海産物の割合はF1の方が高い。しかし調査者の印象としては、2つの複合世帯において女性の漁の位置づけが異なるとは思えなかった。また統計的にも、乾季におけるF2女性の出漁回数が2回と少なかったため、売却した漁獲量に有意差があるとはいえない。
- 19) 女性がおこなうよう期待されている家事とは、調理のほか、水汲みや薪拾い、洗濯などである。1996年の雨季におこなったタイム・アロケーション調査(飯田 2001)の結果では、日帰りの漁撈に出ている割合は男性が8.7%であったのに対し女性は1.3%と少なく、逆に薪拾いや水汲みや洗濯などの用事で村を出ている割合は男性が3.5%だったのに対し女性は9.9%と多かった。なかでも洗濯は、男性がおこなうのは恥ずかしい(*mahamenatse*)行為とされている。
- 20) ただし、1996年の乾季には遠隔地で潜水ナマコ漁に従事していた。
- 21) このような理由づけは、先に述べた「乗り気がしないから」という理由づけとは異なり、呪医 *ombiasa* や憑依霊 *doany* による診断を根拠としている。ヴェズの人々にとって、自分に妬みを持つ者が呪薬を施すという過程は、体調を崩すことの明確な「原因」といえる。
- 22) 漁獲効率の分散が磯漁りと大きく異なる場合には、通常の *t*-検定は適当でない。そこで等分散性を5%水準で検定したところ、②と③では分散が等しく、①と④では分散が等しくないと考えられた。このため、②と③の場合には通常の *t*-検定を、①と④の場合にはCochran-Cox法による *t*-検定をおこなった。
- 23) 乾燥したトウモロコシ100g中に含まれる熱量は、白品種と薄白品種では357Cal、黄品種では364Calとされている(NP/NCCD and FAO 1968)。
- 24) ただし、サンゴ礁水域の漁撈一般がアンパンシラヴァ村と同様の特徴を必ず備えるというわけではない。たとえばわが国の沖縄県石垣島のサンゴ礁水域では、30名以上の漁民が一団となり、8.5トンの大型漁船や魚群探知機を駆使しながら潜水追い込み網漁をおこなっている(竹川 1996)。
- 25) *longo* と *foko* はほぼ同義で使われるが、*foko* は親族という意味からさらに転じて、隣接して住む親族の敷地全体 *lakoro* をも意味する。つまり、*foko* という語は親族の範囲を空間的に限定するニュアンスが強く、複合世帯の意味により近いといえるかもしれない。*foko* が *longo* より限定された範囲を意味することは、やはりマダガスカル南西部のマシクルを調査したLavondès(1967: 44-46)も報告している。

- 26) たとえ血縁的なつながりのない者であっても、いったん親族と認めた相手に対して扶助を拒否すれば、何らかの悪評が立つことを覚悟しなければならない。「わが親族」と声をかけながら近づいてくる他人を多くのヴェズが警戒するのはこのためである。また、血盟の儀礼をおこなった相手 *fatidrà* (Koechlin 1975: 137) に対して扶助を拒否すると、悪評より深刻な報復や破局が予想されるため、血盟を結ぶのに躊躇する人々も多い。
- 27) 労働に参加することなく収穫にありつく「ただ乗り (free ride)」がみられないことに関しては、いくつかの狩猟採集社会の事例にもとづき、「盗みの許容 (tolerated theft)」の問題として議論されてきた (Blurton Jones 1984; Kaplan and Hill 1985)。複合世帯内部の一般的互酬性もこの観点から説明できる可能性があるが、互酬的交換の対象があまりに多岐にわたるため、ここではそれを論じる準備がない。
- 28) 農耕により強く依存する近隣の村では、食事において副食を食べる割合は44%、魚を副食として食べる割合は23%にすぎず、食事における魚の重要性はさらに低い。
- 29) 食料安全保障を志向する近隣農村のリスク回避型家計に対し、アンパンラヴァ村の家計を筆者は利潤最大化型と呼んだ (飯田 2001)。これは、リスク回避と利潤最大化が対照的な合理性であり、2つの村を対比させるのにもこれらの語が適当だと判断したためである。しかし、現金獲得を必ずしも重視しないアンパンラヴァ村の家計を利潤最大化型と呼べば、誤解を招く恐れがあろう。むしろリスク中立型と呼んだ方がよい。なお、リスク回避と利潤最大化は、一般に論じられるほど背反的な対概念ではない (Berry 1984: 71)。
- 30) このように「贅沢な魚消費」は、植民地時代末期の1959年頃に他地域のヴェズ社会でもみられた。トゥリアラ市以南に住んでいた5人構成の世帯では、年間の現金収入 68,000FMGのうち農作物購入にあてられたのは 9,000FMG にすぎなかったが、魚の自家消費は 36,500FMG にのぼった。のみならず、別途 1,000FMG もの魚が現金購入されていた (Battistini 1964: 130-131)。この地域では当時、村を離れておこなうサワラ漁が大きな現金収入をもたらしていたことから、この現金収入が「贅沢な魚消費」を可能にしていたと推測できる。これに対し当時のアンパンラヴァ村では、サワラ漁をおこなっておらずナマコやフカヒレもまだ売れていなかった (*mbo tsy niletake*) ため、今ほど生活に余裕がなく苦しかった (*sarotse fiaïna*) という。ヴェズ社会の動態は、貨幣制度や海産物需要などマクロな経済現象との関わりから明らかにする必要があるといえるだろう。

## 文 献

- アボット, R. T. ・ダンス, S. P.  
1985 [1982] 『世界海産貝類大図鑑』渡部忠重・奥谷喬司 監修・訳, 東京: 平凡社。
- Akimichi, Tomoya  
1975 Individual tuna trolling strategies and transmission of fishing skills in a local community of Shimokita Peninsula. *Journal of Human Ergology* 4, 83-101.
- 秋道智彌  
1976 「漁撈活動と魚の生態——ソロモン諸島マライタ島の事例」『季刊人類学』7(2), 76-131。  
1977 「伝統漁撈における技能の研究——下北半島・大間のババガレイ漁」『国立民族学博物館研究報告』2(4), 702-764。  
1995 「東南アジア・オセアニアの水産資源とエスノ・ネットワーク」秋道智彌編『イルカとナマコと海人たち——熱帯の漁撈文化誌』pp. 7-50, 東京: 日本放送出版協会。
- 秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎  
1995 「生態人類学の領域と展望」秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎編『生態人類学を学ぶ人のために』pp. 3-16, 京都: 世界思想社。
- Astuti, Rita  
1995a *People of the Sea: Identity and Descent among the Vevo of Madagascar*. Cambridge: Cambridge University Press.  
1995b 'The Vevo are not a kind of people': Identity, difference, and 'ethnicity' among a fishing people of Western Madagascar. *American Ethnologist* 22(3), 464-482.

- Barnes, R. H.  
1996 *Sea Hunters of Indonesia: Fishers and Weavers of Lamalera*. Oxford: Clarendon Press.
- Bauchot, Marie-Louise et Gabriella Bianchi  
1984 *Guide des poissons commerciaux de Madagascar: Espèces marines et d'eaux saumâtres* (Fiches FAO d'identification des espèces pour les besoins de la pêche). Rome: Organisation des Nations Unies pour l'Alimentation et l'Agriculture.
- Battistini, René  
1964 *Géographie humaine de la plaine cotière Mahafaly*. Paris: Editions Cujas.
- Berry, Sara S.  
1984 The food crisis and agrarian change in Africa: A review essay. *African Studies Review* 27(2), 59-112.
- Blurton Jones, Nicholas G.  
1984 A selfish origin for human food sharing: Tolerated theft. *Ethnology and Sociobiology* 5, 1-3.
- Bryant, Raymond L. and Sinéad Bailey  
1997 *Third World Political Ecology*. London: Routledge.
- Cannon, L. R. G. and H. Silver  
1994 *North Australian Sea Cucumbers* (CD-ROM). Amsterdam: Expert Center for Taxonomic Identification, University of Amsterdam.
- Dance, S. Peter  
1992 *Shells*. London: Dorling Kindersley.
- Escobar, Arturo  
1999 After nature: Steps to an antiessentialist political ecology. *Current Anthropology* 40(1), 1-30.
- Firth, Raymond  
1966 [1946] *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Grandidier, Alfred et Guillaume Grandidier  
1908 *Ethnographie de Madagascar, tome IV*. Paris: Imprimerie National.
- Griffith, J. F. and R. Ranaivoson  
1972 Madagascar. In J. F. Griffith (ed.) *Climates of Africa* (World Survey of Climatology 10), pp. 461-499. Amsterdam: Elsevier Publishing Company.
- 原子令三  
1972 「嵯峨島漁民の生態人類学的研究——とくに漁撈活動をめぐる自然と人間の諸関係について」『人類学雑誌』80(2), 81-112.
- 市川光雄  
1977 「宮古群島大神島における漁撈活動」加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編『探検・地理・民族誌』pp. 495-533, 東京: 中央公論社。
- Ichikawa, Mitsuo  
1991 The impact of commoditisation on the Mbuti of eastern Zaire. In N. Peterson and T. Matsuyama (eds) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies 30), pp. 133-162. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 飯田 卓  
1998a 「マダガスカルのナマコ漁」『月刊アフリカ』38(2), 9-13。  
1998b 「マダガスカルの海洋民ヴェズ」『季刊民族学』86, 59-67。  
2000 「インド洋のカヌー文化——マダガスカル沿岸漁民ヴェズの村から」尾本恵市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編『海のアジア2——モンスーン文化圏』pp. 181-207, 東京: 岩波書店。  
2001 「マダガスカル南西海岸部における漁家経済と農家経済——生業と食生活の分析から」『アフリカ研究』57, 37-54。
- Irimoto, Takashi  
1972 The ecological study of the sea-food gatherers on rocky coast: Role of age and sex in time-space structure of human ecological system. *Journal of Anthropological Society*

- of *Nippon* (『人類学雑誌』) 80(4), 351-373.
- Kaplan, Hillard and Kim Hill  
 1985 Food sharing among Ache foragers: Tests of explanatory hypotheses. *Current Anthropology* 26(2), 223-246.
- Koechlin, Bernard  
 1975 *Les Vezo du sud-ouest de Madagascar: Contribution à l'étude de l'éco-système de semi-nomades marins*. Paris: Mouton.
- Kottak, Conrad P.  
 1999 The new ecological anthropology. *American Anthropologist* 101(1), 23-35.
- Kuchikura, Yukio  
 1975 The structure of the fishing activity system and division of labor according to age in a local fishing community of Okinawa. *Journal of Human Ergology* 3, 105-130.
- Lavondès, Henri  
 1967 *Bekoropoka: Quelques aspects de la vie familiale et sociale d'un village malgache*. Paris: Mouton.
- 益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫編  
 1988 『日本産魚類大図鑑』東京: 東海大学出版会。
- 松井 健  
 1998 「マイナー・サブシステムの世界——民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点1——民俗の技術』pp. 247-268, 東京: 朝倉書店。
- 西島信昇  
 1988 「サンゴ礁海域における増養殖と漁場利用の方向」諸喜田茂充編『サンゴ礁域の増養殖』pp.26-35, 東京: 緑書房。
- NP/NCCD (Nutrition Program, National Center for Chronic Disease Control) and FAO (Food and Agriculture Organization)  
 1968 *Food Composition Table for Use in Africa*. Bethesda: NP/NCCD.
- Ohtsuka, Ryutaro  
 1970 Ecology of the Nasake fishermen (progress report): The temporal and spatial structure of their activity system as revealed by an individual-tracing method. *Journal of Anthropological Society of Nippon* (『人類学雑誌』) 78(2), 121-139.
- Orlove, Benjamin S.  
 1980 Ecological anthropology. *Annual Review of Anthropology* 9, 235-273.
- Ottino, Paul  
 1963 *Les économies paysannes malgaches du bas Mangoky*. Paris: Editions Berger-Levrault.
- Pichon, M.  
 1972 The coral reefs of Madagascar. In R. Battistini and G. Richard-Vindard (eds) *Biogeography and Ecology in Madagascar*, pp. 367-410. Hague: Dr. W. Junk B. V. Publishers.
- Sahlins, Marshall  
 1972 *Stone Age Economics*. New York: Aldine de Gruyter.
- Sather, Clifford  
 1997 *The Bajau Laut: Adaptation, History, and the Fate in a Maritime Fishing Society of South-eastern Sabah*. Oxford: Oxford University Press.
- Scoones, Ian  
 1999 New ecology and the social sciences: What prospects for a fruitful engagement? *Annual Review of Anthropology* 28, 479-507.
- Scott, James S.  
 1976 *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.
- 島田周平  
 1999 「新しいアフリカ農村研究の可能性を求めて——ポリティカル・エコロジー論との交差から」池野旬編『アフリカ農村像の再検討』pp. 205-254, 東京: アジア経済研究所。

飯田 マダガスカル南西部ヴェズにおける漁撈活動と漁家経済

諸喜田茂充

1988 「サンゴ礁域の環境特性」 諸喜田茂充編『サンゴ礁域の増養殖』 pp.8-25, 東京:緑書房。

Smith, Margaret M. and Philkip C. Heemstra (eds)

1991 [1986] *Smiths' Sea Fishes*. Johannesburg: Southern Book Publishers.

菅豊

1998 「深い遊び——マイナー・サブシステムの伝承論」 篠原徹編『現代民俗学の視点1——民俗の技術』 pp. 217-246, 東京: 朝倉書店。

竹川大介

1996 「沖縄糸満系漁民の進取性と環境適応——潜水追込網漁アギヤーの分析をもとに」『列島の文化史』 10, 75-120。

田和正孝

1997 『漁場利用の生態——文化地理学的考察』 福岡: 九州大学出版会。

寺嶋秀明

1977 「久高島の漁撈活動——沖縄諸島の一沿岸漁村における生態人類学的研究」伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』 pp. 167-239, 東京: 雄山閣出版。

テストール, アラン

1995 [1982] 『新不平等起源論——狩猟=採集民の民族学』 山内昶訳, 東京: 法政大学出版局。

Tudor, Gill

1998 [1971] Madagascar: Economy. In *Africa South of Sahara 1999*, pp. 638-643. London: Europa Publications.

van der Elst, Rudy

1981 *A Guide to the Common Sea Fishes of Southern Africa*. Cape Town: Struik.

Vayda, Andrew P. and Bradley B. Walters

1999 Against political ecology. *Human Ecology* 27(1), 167-179.

Watts, Michael

1983 *Silent Violence: Food, Famine and Peasantry in Northern Nigeria*. Berkeley: University of California Press.

Yesner, David R.

1980 Maritime hunter-gatherers: Ecology and prehistory. *Current Anthropology* 21(6), 727-750.

付表 調査対象となった複合世帯による漁撈活動と漁獲

金額への換算率は本文5.1.5.3、6.3を参照。複合世帯に含まれないF1の親族は出漁しても分配を受けず、かわりに宿泊先の世帯が多めに分配を受けていた。このような場合、分配は複合世帯内部でなされたものと見なした。

【F1、1996年乾季】

日付	漁種	漁撈時間 (時:分)	従事者	売却した漁獲		複合世帯内部で分配された漁獲		複合世帯の外に分配された漁獲		漁獲効率 (FMG/人・時)
				内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	
6月 9日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11日	追い込み刺網	4:28	2C, 3A	魚0.5(浜売)、魚1.65(塩魚)	3,470	魚6.5	6,500	-	0	1,116.045
13日	追い込み刺網	3:46	3A	魚4.5(浜売)	4,500	魚5.95	5,950	-	0	2,774.336
15日	追い込み刺網	3:43	2C, 3A, 2fの夫	魚9.75(浜売)	9,750	魚3.75	3,750	-	0	1,210.762
	磯漁り	1:31	2e	タコ0.75	750	-	0	-	0	494.505
	磯漁り	2:35	2c	タコ1.15	1,150	-	0	-	0	445.161
	磯漁り	1:10	2f, 2i	-	0	-	0	-	0	0.000
17日	追い込み刺網	4:26	2C, 2E, 3A	魚11(浜売) ナマコ(1個)	11,500	魚5.8	5,800	魚1.5(親族へ)	1,500	1,413.534
	磯漁り	1:57	2c, 2f, 2i	タコ1.76	1,760	魚0.15	150	-	0	326.496
	磯漁り	2:01	2e	タコ0.3 ナマコ(1個)	700	-	0	-	0	347.107
19日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21日	追い込み刺網	4:04	2C, 2i	-	-	魚8.85、イカ1.5	10,350	-	0	1,272.541

【F1、1998年雨季】

日付	漁種	漁撈時間 (時:分)	従事者	売却した漁獲		複合世帯内部で分配された漁獲		複合世帯の外に分配された漁獲		漁獲効率 (FMG/人・時)
				内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	
1月10日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12日	まき網	2:31	1A, 2E	-	-	-	-	-	-	-
	(他のカヌーによる協業)	2:26	2C	魚1.5(塩魚)、キビナゴ35.8	28,200	魚2.6、キビナゴ0.1	2,675	キビナゴ0.5(隣人へ)	375	3,078.818
	(他のカヌーによる協業)	2:41	2fの夫	-	-	-	-	-	-	-
14日	追い込み刺網	4:56	3A, 2fの夫	魚1.9(塩魚)	1,710	魚10.5	10,500	-	0	1,237.500
16日	まき網	3:58	3A	-	0	魚1.6	1,600	-	0	213.333
	(他のカヌーによる協業)	1:46	1A, 2fの夫	-	-	-	-	-	-	-
18日	追い込み刺網	1:54	3A	魚0.5(浜売)	500	魚2.1	2,100	魚0.6(親族へ)	600	1,684.211
20日	追い込み刺網	1:49	2i, 2gの夫	-	0	魚5.09	4,490	魚1(親族へ)、魚0.6(2gの夫へ)	1,600	1,676.147
22日	追い込み刺網	1:36	2i, 2hの夫の弟	-	0	魚2.31	2,310	魚0.69(2hの夫の弟へ)	690	937.500
24日	追い込み刺網	1:56	2E, 3A	-	0	魚3.8	3,800	-	0	982.759
	追い込み刺網	2:00	2E, 2e	-	0	魚3.1	3,100	-	0	775.000
	まき網、置き刺網(浅瀬)	3:20	2i	キビナゴ18.5	13,875	魚0.05	50	-	0	1,212.627
28日	まき網、置き刺網(浅瀬)	2:43	1A, 2E, 3A	-	-	-	-	-	-	-
	(他のカヌーによる協業)	4:21	2i	魚1.3(塩魚)、タコ0.4	1,370	魚2.9	2,900	-	0	390.549
	(他のカヌーによる協業)	3:57	3A	-	-	-	-	-	-	-
30日	追い込み刺網	1:19	1A, 2E	-	-	-	-	-	-	-
	追い込み刺網	3:40	2i, 3A	魚1.75(塩魚)	1,575	魚3.4、タコ0.3	3,550	-	0	698.864
	磯漁り	1:30	2g, 2i	ナマコ(3個)	450	-	0	-	0	150.000
2月 1日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3日	まき網、置き刺網(浅瀬)	2:29	1A, 2C, 3A	-	-	-	-	-	-	-
	(他のカヌーによる協業)	2:10	2E	魚1.77(塩魚)	3,186	魚6.73	6,730	-	0	894.677
	(網の設置)	0:44	2E, 2iの婚約者	-	-	-	-	-	-	-
5日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7日	追い込み刺網	3:26	2E, 3A	-	0	魚4.05	4,050	-	0	589.806

付表(続)

【F2、1996年乾季】

日付	漁種	漁撈時間 (時:分)	従事者	売却した漁獲		複合世帯内部で分配された漁獲		複合世帯の外に分配された漁獲		漁獲効率 (FMG/人・時)
				内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	
6月10日	釣り	3:40	3B	魚1.2(浜売)	1,200	-	0	-	0	327.273
12日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14日	釣り	3:17	2D	-	0	魚3.75	3,750	-	0	1,142.132
	潜水漁	2:59	3B	魚1(浜売)、魚1(他の漁師が加工)	1,800	魚1	1,000	-	0	938.547
16日	磯漁り	2:54	2d	-	0	タコ0.15	150	-	0	51.724
	潜水漁	4:12	3B	魚2.1(浜売)	2,100	魚1.3	1,300	-	0	809.524
	潜水漁	4:05	2C、2D	イセエビ1	9,000	魚1.5	1,500	-	0	1,285.714
18日	潜水漁	3:27	2C	タコ7.5、ナマコ(7個)	8,950	-	0	-	0	2,594.203
	釣り	4:23	3B	魚2.49(浜売)	2,490	魚3.18	3,180	-	0	1,293.536
20日	磯漁り	2:48	2d	ナマコ(6個)	400	-	0	-	0	142.857
	潜水漁	3:12	2C	ナマコ(10個)	2,000	魚0.65、タコ0.1	750	-	0	859.375
22日	釣り	4:31	2D	-	0	魚2.72	2,720	-	0	602.214
	釣り	3:59	2C	-	0	魚2.35	2,350	-	0	589.958
	釣り	3:34	2D	-	0	魚1.7	1,700	-	0	476.636

【F2、1998年雨季】

日付	漁種	漁撈時間 (時:分)	従事者	売却した漁獲		複合世帯内部で分配された漁獲		複合世帯の外に分配された漁獲		漁獲効率 (FMG/人・時)
				内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	内訳(kg)	金額(FMG)	
1月11日	追い込み刺網	3:45	2C、3B	-	0	魚6.85	6,850	-	0	913.333
13日	追い込み刺網	3:35	2C、2D	-	0	魚6.35	6,350	-	0	886.047
	磯漁り	2:08	3b	-	0	タコ0.6	300	-	0	140.625
15日	追い込み刺網	3:46	2C、2D	-	0	魚7.9	7,900	-	0	1,048.673
17日	追い込み刺網	2:45	2C、2D	-	0	魚6	6,000	-	0	1,090.909
	追い込み刺網	4:37	3B	-	0	魚4.05	4,500	-	0	974.729
19日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21日	置き刺網(浅瀬)	1:12	3B	魚1(浜売)	1,000	魚7.34	7,340	魚0.28(おまけ)	280	5,621.739
	(網の設置)	0:20	3B	-	-	-	-	-	-	-
23日	置き刺網(浅瀬)	3:00	3B	魚2(浜売)、魚8.4(燻製)	14,600	魚3.74	3,740	魚0.16(おまけ)	160	5,550.000
	(網の設置)	0:20	3B	-	-	-	-	-	-	-
25日	追い込み刺網	1:59	2C、2D	-	0	魚5.25	5,200	魚0.45(親族へ)	450	1,424.370
	置き刺網(浅瀬)	2:39	3B	-	0	魚3.04	3,040	-	0	1,018.994
	(網の設置)	0:20	3B	-	0	魚3.04	3,040	-	0	1,018.994
27日	追い込み刺網	3:34	2C、2D	-	0	魚4.6	4,600	-	0	644.860
	追い込み刺網	3:13	3B	魚2.7(燻製)	4,050	魚0.81	810	-	0	1,510.881
29日	磯漁り	1:46	2d	-	0	イセエビ0.05	450	-	0	254.717
	磯漁り	1:31	3a	イセエビ0.2	1,800	-	0	-	0	1,186.813
29日	追い込み刺網	3:48	3B、3b	-	0	魚1.5	1,500	-	0	197.368
31日	追い込み刺網	3:14	3B	ナマコ(1個)	300	魚5.35	5,350	-	0	1,747.423
2月 2日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4日	追い込み刺網	2:30	2C、2D	-	0	魚3.6	3,600	-	0	720.000
6日	出漁せず	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8日	置き刺網(浅瀬)	1:11	3B、3b	-	0	魚2.14	2,140	-	0	792.593
	(網の設置)	0:20	3B	-	-	-	-	-	-	-
	置き刺網(浅瀬)	2:41	2C	-	0	魚5.25	5,250	-	0	1,740.331
	(網の設置)	0:20	2C	-	-	-	-	-	-	-
	潜水漁	2:28	3B	ナマコ(1個)	900	魚1.15、タコ1.15	1,725	-	0	1,064.189